

TACHI OKA
立岡古墳群

—熊本県宇土市立岡町字西潤野・中潤野所在—

宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集

1992

熊本県宇土市教育委員会

TACHI OKA
立岡古墳群

—熊本県宇土市立岡町字西潤野・中潤野所在—

宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集

1992

熊本県宇土市教育委員会

序

宇土市の位置する宇土半島基部は、熊本県内はもとより九州でも有数の古墳集中地帯として知られています。その半島基部の東端にある宇土市立岡地区から花園地区にかけては、特色のある古墳が集中している地区でもあり、古くから広く知られていました。

平成2年度と3年度に行なった立岡古墳群内の4基の古墳の調査は、住宅開発計画に伴って行なった緊急確認調査ではありましたが、多くの方々のご協力とご指導のもとに貴重な成果を収めることができました。調査を行なった4基のうち、西潤野2号墳・潤野2号墳・潤野3号墳の3基は新たに発見されたものであり、さらには西潤野2号墳と潤野3号墳は未盗掘でありました。昭和40年代以後の開発ラッシュの中に、このように良好な状態で古墳が残されてきたことは奇跡的ともいえることです。また本書に収録したとおり、内容的にも当初の予想を遙かに上回る極めて貴重な古墳群であることがわかりました。

このように貴重な文化遺産である立岡古墳群が、当市のみならず熊本県の歴史教育の拠点として活用されることを望みます。

調査の実施に当たっては、絶大なるご理解とご協力を賜りました東南産業株式会社・東南観光株式会社・トーナレークカントリークラブ、また調査指導を賜りました各位、並びに文化庁・熊本県教育委員会に対し、厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

宇土市教育委員会

教育長 三浦孝之

例 言

1. 本書は、国庫・県費補助を得て実施している宇土半島基部遺跡詳細分布調査事業の報告書である。
2. 本書には、平成2年度に確認調査を実施し未報告であった西潤野古墳・西潤野2号墳と、平成3年度に実施した潤野2号墳・潤野3号墳の確認調査についてその成果を収録した。
3. 調査は、宇土市教育委員会が多くの方々の指導・協力を得て実施したもので、その組織と芳名については、I.3に別記した。
4. 実測図で用いたレベルは海拔標高であり、方位は磁北である。
5. 遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は、平成2年度分については高木恭二・木下洋介、平成3年度分については高木・元松茂樹が主に行なった。このほか、写真の焼付と編集は木下が行ない、製図については安達武敏も一部分担した。
6. 西潤野2号墳出土人骨については、長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸助教授・分部哲秋氏・佐伯和信氏から玉箸を戴き付論1に掲載した。また、西潤野2号墳の赤色顔料の分析については、福岡市縄文文化財センターの本田光子氏と宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏に玉箸を戴き付論2に掲載した。ご多忙のなか執筆戴いた諸先生に謝意を表したい。
7. 本書の執筆・編集については、I.序説を高木・元松、II.立地と環境・V.潤野2号墳の調査・VI.潤野3号墳の調査を元松、IV.63竪溝を木下、III.西潤野古墳の調査・IV.西潤野2号墳の調査・VII.総括を高木が担当した。
8. 出土遺物をはじめ関係資料については宇土市教育委員会が保管している。

5. 出土遺物	55
6. 小 結	58
Ⅶ. 総括 -立岡古墳群の位置付けにかえて-	63
付論. 1. 熊本県宇土市西潤野2号墳出土の古墳時代人骨	71
2. 西潤野2号墳出土の赤色顔料について	85

表 目 次

Ⅱ	
第1表 宇土半島基部古墳時代主要遺跡地名表	12
Ⅳ	
第2表 西潤野2号墳出土堅筒計測表	34
Ⅵ	
第3表 立岡・花園地区周辺古墳概要	65
第4表 周辺地域古墳編年表	66
付論. 1	
第5表 胴頭蓋計測値	78
第6表 顔面頭蓋計測値	78
第7表 鼻根部計測値	79
第8表 下顎骨計測値	79
第9表 上腕骨計測値	79
第10表 桡骨計測値	79
第11表 尺骨計測値	80
第12表 大腿骨計測値	80
第13表 脛骨計測値	80
第14表 形態小変値	80
第15表 歯の計測値	81
第16表 齧蝕とその程度	81
付論. 2	
第17表 赤色顔料の分析結果及び推定される赤色顔料の種類	89

挿 図 目 次

Ⅱ	
第1図 宇土半島基部古墳時代主要遺跡分布図	10
第2図 立岡古墳群古墳分布図	11

本文目次

I. 序説	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の経過	2
3. 調査の組織	4
II. 立地と環境	8
III. 西潤野古墳の調査	
1. 墳丘と配列	13
2. 1号棺	13
3. 2号棺	17
4. 3号棺	20
5. 小 結	20
IV. 西潤野2号墳の調査	
1. 墳 丘	24
2. 近世墓	24
3. 墓 塚	24
4. 箱形石棺	28
5. 人骨・遺物出土状態	31
6. 出土遺物	33
7. 小 結	37
V. 潤野2号墳の調査	
1. 墳 丘	41
2. 小 結	41
VI. 潤野3号墳の調査	
1. 墳 丘	43
2. 内部主体	47
3. 墳頂祭祀遺構	50
4. その他の埋葬施設	52

第36図	人骨の残存部	74
付論. 2		
第37図	試料の採取位置	86
第38図	遺物取り上げ後の試料採取位置	86
第39図	蛍光X線スペクトル図	90
第40図	X線回折図	91

III

第3図	西洞野古墳・西洞野2号墳地形測量図	14
第4図	西洞野古墳地形測量図	15
第5図	西洞野古墳土層断面図	16
第6図	西洞野古墳1号棺実測図	18
第7図	西洞野古墳2号棺実測図	19
第8図	西洞野古墳3号棺実測図	21
第9図	西洞野古墳3号棺復原図	22

IV

第10図	西洞野2号墳地形測量図	25
第11図	西洞野2号墳土層断面図	26
第12図	西洞野2号墳近世墓実測図	27
第13図	西洞野2号墳主体部実測図	29
第14図	西洞野2号墳主体部土層断面図	30
第15図	西洞野2号墳箱形石棺蓋石下面実測図	30
第16図	西洞野2号墳箱形石棺棺身側面図	30
第17図	西洞野2号墳棺内出土状態実測図	32
第18図	西洞野2号墳棺内人骨・遺物配置状態	33
第19図	西洞野2号墳鏡・玉出土状態	35
第20図	西洞野2号墳出土遺物実測図	36

V

第21図	洞野2号墳地形測量図	42
------	------------	----

VI

第22図	洞野3号墳地形測量図	44
第23図	洞野3号墳遺構配置図	45
第24図	洞野3号墳土層断面図	46
第25図	洞野3号墳主体部実測図	48
第26図	洞野3号墳主体部土層図・断面図	49
第27図	洞野3号墳墳頂部土師器出土状況	51
第28図	洞野3号墳1号土師器実測図	53
第29図	洞野3号墳2号土師器実測図	54
第30図	洞野3号墳墳頂部出土土師器実測図	57
第31図	洞野3号墳前方部出土土師器実測図	58
第32図	洞野3号墳2号土師器出土ガラス小玉実測図	58
第33図	洞野3号墳主体部構築模式図	59

VII

第34図	立岡・花園地区古墳変遷図	63
------	--------------	----

付論. 1

第35図	遺跡の位置	72
------	-------	----

I. 序 説

1. 調査にいたる経緯

(1). 平成2年度

宇土市立岡町字西潤野に2基の埋葬施設が存在することは地元ではかなり早くから知られていた。昭和34年6月になって、当時宇土高校の教諭であった富樫卯三郎氏は、宇土高校社会部の生徒と共に発掘調査を実施された。発掘といっても既に露出していた石蓋土壇と、小型箱形石棺¹⁾の清掃と実測が主なもので、その概要は宇土高校社会部の機関誌であった「[ともしび] 第5号²⁾」に収録され、西潤野古墳の名で一般に知られている。

その後、2基は露出したままの状態ではあったが、その地にゴルフ場開発計画が起こった際にも、古墳は、工事対象から外され、今日まで守り伝えられてきた³⁾。

ところが、昭和63年10月になって、所有者である東南観光係から古墳を含めた一帯の住宅開発計画が持ち上がり、正式に発掘届けが提出された。これに対し、熊本県教育委員会からは当該地域内には古墳が存在するとして、工事に着手する前に、事前発掘調査を実施するよう指導があり、宇土市教育委員会・熊本県教育委員会と東南観光係で協議を進めることになった。しかし、指導内容の伝達方法や打ち合せに若干の食い違いがあり、1年ほどの空白が生じることになった。

平成2年になって、改めて東南観光係から当該地域の開発についての問い合わせがあり、指導内容に行き違いがあることが判明し、開発計画との調整を行なうか、早急に発掘に着手するなどの必要性が生じ、協議に入った。文化庁・熊本県教育委員会の指導を受けながら致度に及ぶ調整の結果、古墳の概要や範囲・遺存状況を把握するのが急務であり、そのための発掘調査を宇土市教育委員会で実施し、その結果をもって改めて会社側と対策を協議することになった。当初の発掘は平成2年10月にとりかかって、11月には終了の予定であったが、諸般の事情でやや遅れ、平成2年12月末に完了した。

(2). 平成3年度

平成2年度の西潤野の現地発掘調査が完了し、古墳が2ヵ所に存在することが明らかになった。しかも西潤野2号墳が当初は全く予想もしなかった未盗掘で埋葬当時に近い状態で遺存するという極めて良好な状況であったことから、両方を含めた保存問題に発展することになってきた。加えて、発掘調査の途中で、新たに背後の山頂にも古墳が2基存在することがわかり、西潤野の古墳はこれらを含めて立岡古墳群全体として考えなければ開発か保存かの問題を論ずることは出来ないであろうということになり、平成3年度に、背後の潤野2号墳・潤野3号墳の確認調査を実施し、その結果を待って西潤野の2基の古墳についての結論を出す事になった。

2. 調査の経過

(1). 平成2年度

平成2年度は、まず全体の地形測量から着手することとし、まず、墳丘を含めた広い範囲におよぶトラバース測量の為に基準杭設定から始めた。そのため、実質的な地形測量の着手は、10月4日となり、まず西潤野古墳からとりかかった。その後2台の平板により、西潤野2号墳と平行して測量を行い、トレンチの設定は10月22日となった。

発掘調査は、測量と同様に西潤野古墳・西潤野2号墳を平行して行ない、墳丘の範囲・規模の確認と埋葬主体部の遺存状況の把握を主眼として実施した。

その結果、西潤野古墳からは従来より判明していた舟形石蓋土壇・小型箱形石棺の他、石材を抜き取られた箱形石棺を新たに検出することができ、少なくとも3基の埋葬施設の存在を明らかにすることができた。しかし、墳丘については明確な痕跡ないし区画を確認できず、本来墳丘を形成していなかった可能性もある。

西潤野2号墳では、主体部の発掘過程では、地山と思われるほど堅固な層であったため古墳ではない可能性も考えられたが、土色の変化だけを手がかりに掘り下げを行なったところ、主体の一部と思われる阿蘇溶結凝灰岩の蓋石が発見され遺構の残存が確認できたために、トレンチを拡大して墓壇プランを確認し、墓壇内部の掘り下げを行なった。また、円形をなす墳丘に十文字のトレンチを設定し、確実に墳丘の裾と思われる部分を明らかにすることができた。

現場の調査は、平成3年12月27日には一応終了したが、一部の補足的実測と埋め戻しを翌年度に持ち越すことになった。測量開始から発掘終了まで約3ヵ月を要し、実質的には58日を現場作業として費やした。調査日誌抄を以下に収録し、調査中の主な内容を略記しておくことにする。

- 9月25日 トラバース測量のための基準杭設定。
- 10月4日 西潤野古墳の測量着手。
- 10月22日 西潤野2号墳の測量着手と発掘トレンチ設定のための杭打ち。
- 11月13日 西潤野古墳舟形石蓋土壇の露出清掃。西側・北側トレンチの発掘に着手。
- 11月15日 西潤野古墳東側トレンチの発掘に着手。
- 11月19日 西潤野古墳南側トレンチの発掘に着手。
- 11月26日 西潤野2号墳墓壇の北側を検出。
- 11月27日 西潤野古墳の北側丘陵上に従来知られていなかった古墳を新たに確認する。
- 11月28日 西潤野古墳3号棺の発掘。西潤野2号墳墓壇断面の剥ぎ取りを実施。
- 11月29日 西潤野2号墳の土層観察のためのブリッジを取り外し、墓壇内の箱形石棺蓋石を露出させる。

- 11月30日 西潤野2号墳臺城内の箱形石棺の蓋石を開け、内部に一体の人骨と銅鏡・白玉・鉄斧・堅鉤等の遺存を確認する。この日より現場に泊まり込んでの監視を行なう(12月6日まで)。
- 12月3日 人骨取り上げ準備のため遺物・人骨の出土状態を実測。
- 12月6日 福岡市埋蔵文化財センター本田光子氏による赤色顔料採取。長崎大学医学部松下孝幸先生らによる人骨の取り上げ。
- 12月7日 堅鉤取り上げのため奈良国立文化財研究所沢田正昭先生の指導を受ける。西潤野古墳1号墳の蓋石を動かし、土壌内部の清掃を実施。
- 12月9日 現地説明会
- 12月27日 現地作業完了

(2). 平成3年度

平成3年度の調査は、平成3年5月30日に開始し10月30日に終了した。梅雨から夏場にかけての長雨や台風による影響によって5ヵ月にわたったが、実質発掘調査日数は60日余りとなっている。3号墳については、墳丘及び主体部(完掘せず)の確認を中心に行ない、2号墳については、地形測量だけを行なった。

- 5月30日 潤野3号墳から2号墳にかけての樹木伐採に取りかかる(6月26日まで)。
- 6月18日 3号墳にトラバース設定。
- 6月21日 3号墳北側丘陵踏査。
- 6月26日 3号墳墳丘縦横断トレンチ(T1・T2)の発掘に取りかかる。
- 7月10日 3号墳の墳丘測量に取りかかる(8月1日で一旦終了)。
- 7月11日 墳丘頂部より土師器細片出土。
- 7月15日 くびれ部南側トレンチ(T3)の発掘に取りかかる。
- 7月17日 墳頂部の墓壇ラインを確認し写真撮影を行なう。
- 7月18日 T2とT3の交点より土師器出土。前方部南側コーナー確認のためT6の発掘に取りかかる。
- 7月19日 T3より土墳臺(1号)検出。
- 7月22日 北側くびれ部にT4、前方部南側にT5を設定し発掘に取りかかる。
- 7月24日 主体部の発掘に取りかかる。土師器が大量に出土し始めたため、実測図をとりながら発掘を進める。
- 7月25日 2号墳周辺の伐採を始める。3号墳トレンチの写真撮影。
- 7月26日 主体部を約40cm掘り下げたところで土師の検出が終わる。
- 7月31日 地表下約120cmの地点で粘土層の上部を確認。

- 8月2日 東側を除く墓墳底を確認。西端に礫群を確認。
- 8月8日 主体部・1号土墳墓実測と写真撮影。
- 8月20日 前方部南側に土墳墓(2号)確認。2号墳の墳丘測量を始める(8月27日で一旦終了)。
- 8月28日 前方部の北側コーナーを確認するためT7を設定。
- 9月3日 T7でコーナー確認が出来なかったためその東側にT8を設定し発掘に取りかかる。
- 9月5日 3号墳の測量範囲拡大のため測量を再開(9月25日まで)。
- 9月6日 2号土墳の粘土被覆を取り外す。
- 9月9日 唯一不明であった主体部墓墳の東端を確認。
- 9月10日 写真撮影・蓋石実測の終わった2号土墳を開棺。土圧で一部崩壊していたものはほぼ原形を留めており地山掘り残しによる枕とガラス玉2個を検出。赤色顔料サンプリングを行なう。
- 9月14日 (台風17号)
- 9月26日 2号墳の墳丘測量範囲拡大のため測量を再開(10月4日まで)。
- 9月27日 (台風19号)
- 10月7日 主体部の実測に取りかかる(10月16日まで)。
- 10月14日 ゴルフ場周辺の丘陵を踏査。
- 10月16日 トレンチ断面図に取りかかる。
- 10月23日 前方部裾で新たに土墳墓確認(3号土墳)。トレンチ断面図が完成し図面を完了する。

3. 調査の組織

(1). 平成2年度(敬称略)

調査主体	宇土市教育委員会		
	教育長	三浦	孝之
調査総括	生涯学習課長	一	宗雄
	文化振興係長	元田	正一
調査庶務	参事	西本	未子
		中川	啓子
調査担当	参事	高木	恭二
	主事	木下	洋介
調査補助	平江正博・山内高広・佐藤康一・小園淳一・米田幸雄・和田光律・釜賀加代子・		

木村幸子・石田亜裕子・玉垣忍・松尾政義・前田永義・渡辺秋夫・本田亘・浅川
義雄・林田勲・山田勇夫・那須康司・鈴木タケ子・那須洋子・今村キクノ

調査指導

河原 純之 (文化庁記念物課主任調査官)
原口 長之 (熊本県文化財保護審議委員)
白木原和美 (熊本県文化財保護審議委員・熊本大学文学部教授)
三島 格 (肥後考古学会会長)
小田富士雄 (福岡大学人文学部教授)
白石太一郎 (国立歴史民俗博物館教授)
谷口 義介 (熊本短期大学教授)
甲元 真之 (熊本大学文学部助教授)
松下 孝幸 (長崎大学医学部助教授)
佐伯 和信 (長崎大学医学部)
小山田常一 (長崎大学歯学部)

沢田 正昭 (奈良国立文化財研究所保存工学室長)

本田 光子 (福岡市埋蔵文化財センター)

富樫卯三郎 (宇土市文化財保護審議委員)

平野三代喜 (宇土市文化財保護審議委員)

井上 正 (宇土市文化財保護審議委員)

村田 房夫 (宇土市文化財保護審議委員)

鶴田 倉造 (宇土市文化財保護審議委員)

調査協力

東南産業株式会社

トーンレックカントリークラブ

大栄設計係

宇土市シルバー人材センター

江崎正・桑原憲彰・松本健郎・中間昇・安達武敏・古田一英・平山修一・網田

龍生・美濃口雅朗・豊崎見一・清田純一・藤本勇治・元松茂樹

(2). 平成3年度 (敬称略)

調査主体

宇土市教育委員会

教育長 三浦 孝之

調査総括

生涯学習課長 一 宗雄

文化振興係長 大橋 和義

調査庶務

参事 西本 末子

調査担当	参事	高木 恭二
	参事	木下 洋介
	主事	元松 茂樹
調査補助	森本伸一・今村友香・中村次剛・山本二男・前田永義・木村又夫・岡本アキ・山本サチ子・山形ユキ子・釜賀洋子・白石節子・井上タツエ・野田朋子・古川百合香・和田光律・佐藤康一・安永賢司・加藤志津・上原竜児	
調査指導	加藤 充彦（文化庁記念物課主任文化財調査官）	
	原口 長之（熊本県文化財保護審議委員）	
	白木原和美（熊本県文化財保護審議委員・熊本大学文学部教授）	
	三島 格（肥後考古学会会長）	
	間壁 忠彦（倉敷考古館館長）	
	小田富士雄（福岡大学人文学部教授）	
	谷口 義介（熊本短期大学教授）	
	佐藤 伸二（八代工業高等専門学校教授）	
	松下 孝幸（長崎大学医学部助教授）	
	分部 哲秋（長崎大学医学部）	
	佐伯 和信（長崎大学医学部）	
	樽沢 一男（宮崎大学教育学部助教授）	
	西 健一郎（九州大学文学部助手）	
	榑本 照男（豊中市教育委員会主任学芸員）	
	本田 光子（福岡市埋蔵文化財センター）	
	成瀬 正和（宮内庁正倉院事務所）	
	富樫卯三郎（宇土市文化財保護審議委員）	
	平野三代喜（宇土市文化財保護審議委員）	
	井上 正（宇土市文化財保護審議委員）	
	村田 房夫（宇土市文化財保護審議委員）	
鶴田 倉造（宇土市文化財保護審議委員）		
調査協力	東南産業株式会社	
	トーナレークカントリークラブ	
	国立歴史民俗博物館	
	熊本県教育庁文化課	
	熊本商科大学・熊本短期大学文化財研究会 株式会社スカイサーベイ	

脇戸正博・設楽博己・松本健郎・中岡昇・前川清一・矢野和之・安達武敏・
鶴嶋俊彦・田崎博之・池田栄史・宮田浩之・森山栄一・蒲原宏行・清田純一・
岡本正邦

(高木・元松)

註

- 1) 箱形石棺の名称は、採取した板石を何らの加工もなさずそのまま組み合せたものを箱式石棺とし、そのような板石に加工を施して切り石としての面取りや溝を造り出したものを箱形石棺として区別する。
- 2) 富樫卯三郎「西潤野古墳の調査」【ともしび】第5号, 1960年
- 3) 富樫卯三郎「文化財を守る小さな運搬—ヤブに埋もれた古墳—」【うとしま】第6号, 1973年

II. 立地と環境

熊本県のほぼ中央部、宇土半島の基部に位置する宇土市は、熊本市・下益城郡富合町・下益城郡城南町・下益城郡松橋町・宇土郡不知火町・宇土郡三角町の一市五町と接する、面積74.39km²・人口約3万4千人の小さな都市である。宇土半島基部¹⁾とは、県中部から島原半島に向けて西に突き出た宇土半島の付け根にあたる地域で、ちょうど北の熊本平野と南の八代平野が分岐する位置にあたる。この一帯は、二つの平野に接しているにもかかわらず東に雁回山(標高314m)があり、西には半島部から延びる山塊が迫っているため、後世の干拓地を除くと平野部の面積はかなり狭くなっている。しかし、昔から拓けた地域であったようで、県下でも特に古代遺跡の集中した地域として知られており、学術的に著名な遺跡も多い。

宇土半島基部の東隅、雁回山の南東裾にある標高約12mの微高地に、地元で「タチオカヤマ」と呼ばれる丘陵(立岡丘陵・標高約70m)がある。立岡古墳群は、その丘陵を中心とした一帯に造られており、行政的には宇土市立岡町と下益城郡松橋町に跨る。現状で丘陵の頂部に位置するのが潤野3号墳²⁾で、その西側に潤野2号墳と潤野古墳、南側に西潤野古墳と西潤野2号墳がある。これらの古墳は接しているわけではなく、おおそ100m前後離れて位置している。また、潤野3号墳の北約300mにある独立丘陵頂部には晩免古墳(花園陵墓参考地)、立岡丘陵の東隅には山下古墳(行政区では下益城郡松橋町)があり、これら現存する7基を総称して「立岡古墳群」と呼ぶ。最高位にある潤野3号墳からは、北は雁回山・南は道徳山・西は高城丘陵で視界を遮られるものの、北西に有明海と熊本平野、南西に八代(不知火)海と八代平野を望むことができる。ただし、他の古墳からは標高の関係もあって眺望はほとんど効かない。立岡丘陵の東側一帯は、ゴルフ場造成の際に地形の改変を受けており、その際に潤野3号墳の墳丘の間近まで削り取られている。しかし、そこを除けば地形の改変はほとんど受けておらず、古墳築造当時の様相を今に伝えていると言える。また、民家に近いにもかかわらず奇跡的にも西潤野2号墳と潤野3号墳は未盗掘であったし、潤野2号墳もその可能性が高い。このように良好な状態で古墳群そのものが残されていることは特筆すべき事である。古墳群の位置は、宇土市街地から直線距離で南東に約2km、著名な向野田古墳からは北東に約1.5kmの距離である。付近には、曾畑式土器で有名な曾畑貝塚や、櫛崎古墳・女夫塚(男塚)古墳・女夫塚(女塚)古墳の前方後円墳などがあり、遺跡の集中地帯のひとつとなっている。

次に、古墳時代に限定して半島基部の主要遺跡の概略を述べたい。

古墳時代に特に注目されるのは前期の前方後円墳である。三角縁四神四獣鏡が出土した城ノ越古墳(全長約43m、以下同じ)、長大な竪穴式石槨に木棺を納める弁天山古墳(53m)と迫ノ上古墳(56m)、竪穴式石槨に大型の舟形石棺を納め女性一人を葬った向野田古墳(86m)、壺形土師器が列をなして確認されたスリバチ山古墳(96m)、未調査ではあるが向野田古墳より高

位に位置する御手水古墳(65m)の計6基が知られている。さらには今回の潤野3号墳と潤野2号墳もその可能性があり、九州でも有数の前期古墳集中地帯となっている。中期以降は前期ほどではないにせよ、中期では、県下最大級の規模を誇る天神山古墳(110m)と5基の埋葬施設をもつ楢崎古墳(46m)の2基。後期では、横穴式石室に平入りの家形石棺を納める国越古墳(62m)、未調査ではあるが松橋大塚古墳(79m)・女夫塚男塚古墳(46m)・女夫塚女塚古墳(40m?)、仁王塚古墳(47m)の5基があり、前方後円墳全体としては前期6基・中期2基・後期5基の計13基(潤野2・3号を除く)となる。半島基部の前方後円墳群について、富樫卯三郎氏は4グループの存在を指摘されていた³⁾が、今回の調査によって、宇土市立岡地区から花園地区にかけての狭い範囲にある古墳(富樫氏分類による第Ⅲグループ)だけで一群をなすことが改めてわかり、それを裏付ける結果となった。他の古墳についても、このようになり狭い範囲に限定してグルーピングする必要があるだろう。このことについては、第Ⅶ章で詳述する。

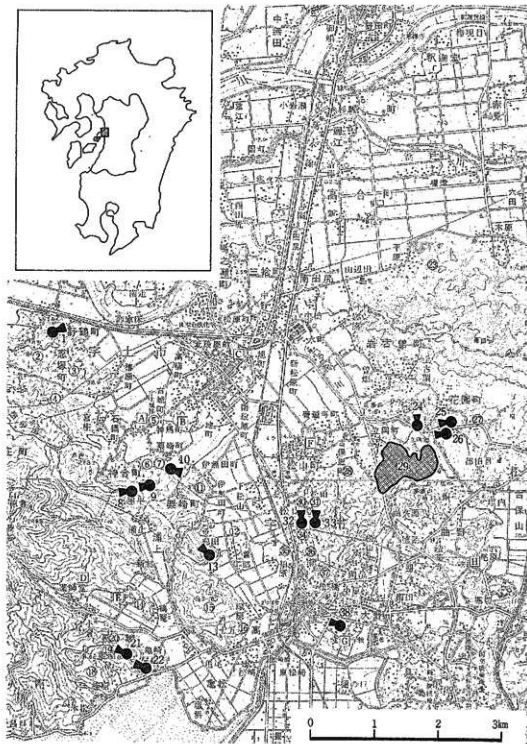
前方後円墳以外でも貴重な古墳は多い。装飾古墳では、鴨籠古墳(舟形石棺⁴⁾、直弧文)・晩免古墳(家形石棺、菊花状文ほか)・潤野古墳(家形石棺、円文ほか)・国越古墳(横穴式石室、直弧文ほか)・宇賀岳古墳(横穴式石室、連続三角文ほか)・仮又古墳(横穴式石室、舟の線刻)・梅崎古墳(横穴式石室、舟の線刻)・塚原1号墳(横穴式石室、舟の線刻)・桂原古墳(横穴式石室、舟の線刻)などがある。このほかにも、長大な竪穴式石室に木棺を納め船載の鳥獣鏡が副葬されていたチャン山古墳、家形石棺内の刀掛突起に剣がのせられていた神ノ山1号墳、横穴式石室内から20体もの人骨が出土した塚原平古墳など、特徴的な古墳が多い。

古墳以外としては、住居址の調査例は少ないものの、墳口遺跡と城山遺跡(近世宇土城跡)は大規模な拠点集落の可能性があり、スリパチ山古墳・追ノ上古墳の眼下にある中世宇土城跡(西岡台)では、丘陵の頂部を取り囲むように布留式の土器を伴ったV字溝が確認されており、古墳時代前期の豪族居館という見解が有力である。また、須恵器や埴輪の生産遺跡もいくつか確認されており、なかでも元米ノ山窯跡と当尾窯跡は、須恵器製作址としては今のところ県内最古とされている⁵⁾。

(元松)

註

- 1) 行政的には、宇土市東部・不知火町東部・松橋町北部がこれにあたる。
- 2) 現状では立岡丘陵の頂部は潤野3号墳となっているが、ゴルフ場造成前はその東側がさらに高く頂部となっていた。造成の際に消滅したが、そこには別の古墳があって人骨が出土したと伝えられている。
- 3) 弁天山古墳・追ノ上古墳・女夫塚古墳・向野田古墳をそれぞれ中心として、距離的に近い古墳を4つのグループに分類している。(富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」『宇土城跡(西岡台)』1977年)
- 4) 鴨籠古墳の石棺の形態について、これまでは一般的には家形石棺とされてきた。しかし高木は、家形石棺とは全く別系統のものであるとして、舟形石棺の一種として捉えている。(高木恭二・渡辺一徳「石棺研究への提言」『古代文化』第42巻第1号、1990年)
- 5) 西住欣一郎「肥後における古墳時代研究の現状と課題」『交流の考古学』肥後考古第8号、1991年



第1図 宇土半島基部古墳時代主要遺跡分布図 (1:60,000)

(国土地理院発行、1:50,000、熊本・八代々使用)



第2図 立岡古墳群古墳分布図 (1:7,000)

第1表 宇土半島基部古墳時代主要遺跡地名表

No	遺跡名	備考	No	遺跡名	備考
1	天神山古墳	前方後円墳	29	立岡古墳群	
2	神ノ木山古墳	横穴式石室	a	晚免古墳	円墳・家形石棺・装飾
3	東畑古墳	横穴式石室・線刻	b	潤野古墳	円墳・家形石棺・装飾
4	飯又古墳	横穴式石室・舟の線刻	c	潤野2号墳	前方後円墳?
5	西岡台箱式古墳		d	潤野3号墳	前方後円墳?・粘土部
6	神合古墳	円墳・埴輪	e	西潤野古墳	埋葬施設3基
7	猫ノ城古墳	円墳	f	西潤野2号墳	円墳・箱形石棺
8	スリバチ山古墳	前方後円墳・壺形土師器列	g	山下古墳	円墳・埴輪
9	迫ノ上古墳	前方後円墳・壺穴式石椁	30	チャン山古墳	壺穴式石椁・船載鳥獣鏡
10	城ノ越古墳	前方後円墳・三角縁神獸鏡	31	南山内箱式石椁群	3基
11	久保古墳	円墳	32	向野田古墳	前方後円墳・舟形石棺
12	北園鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	33	御平水古墳	前方後円墳
13	仁王塚古墳	前方後円墳	34	キリギス山古墳	
14	鶴籠古墳	舟形石棺・直弧文	35	柏原古墳	円墳
15	塚原1号墳	横穴式石室・舟の線刻	36	御領東原古墳群	横穴式石室3基
16	塚原平古墳	横穴式石室・埴輪	37	宇賀岳古墳	横穴式石室・線刻
17	桂原古墳	横穴式石室・舟の線刻	38	松橋大塚古墳	前方後円墳・埴輪
18	塩屋浦鬼の岩屋古墳	横穴式石室			
19	遠免古墳	円墳・埴輪			
20	八久保古墳	円墳・箱形石棺	A	西岡台遺跡	前期V字溝・土師器・埴輪
21	園越古墳	前方後円墳・横穴式石室	B	城山遺跡	土師器
22	弁天山古墳	前方後円墳・壺穴式石椁	C	石ノ瀬遺跡	埴輪
23	神ノ上古墳	円墳・横穴式石室	D	元米ノ山遺跡	須恵器製作址
24	楢崎古墳	前方後円墳・埋葬施設5基	E	朱斗遺跡	須恵器製作址
25	女夫塚(女塚)	前方後円墳	F	境目遺跡	土師器
26	女夫塚(男塚)	前方後円墳	G	前田遺跡	埴輪包蔵地(製作址?)
27	三日鬼の岩屋古墳	円墳・横穴式石室	H	当尾露跡	須恵器製作址
28	神ノ山古墳	家形石棺			

ニシウロノ

Ⅲ. 西潤野古墳の調査

第1章1でも記したように、昭和34年に富樫卯三郎氏らを中心として実測・清掃が行なわれ、既に露出していた屋根形をなす蓋石に土壌をもつ簡易なもので、それと小型の箱形石棺の清掃と実測が実施されている。

今回、すでに分かっていた2基の埋葬遺構(石蓋土壙を1号棺とし、その北側に位置する小型の箱形石棺を2号棺とする)の再調査と、今回設定したトレンチにおいて新たに検出された箱形石棺(3号棺と呼ぶ)の調査を行なった。

1. 墳丘と配列

先に述べたように、古墳としてのとり扱いをすることにはかなりの問題があるものの、学史的なことや、現段階での不確定的な要素からみれば、一応古墳の名を冠しておくのが妥当と思われる。発掘は、従来から分かっていた2基の埋葬施設を中心として丘頂に十文字のトレンチを設定し、それを周辺に延長して実施した。十文字の交点を残し、西側を第1トレンチ、北側を第2トレンチ、東側を第3トレンチ、南側を第4トレンチとした。しかし、各トレンチにおいては、顕著な土層変化は見られず、墳丘盛土を示すような形跡は観察できなかつたし、全体を区画するような溝も検出されていない。

今回新たに検出されたものや従来から分かっていたものまでふくめた3基の埋葬施設の配列や主軸のとりかたからみても自然地形の高まりを利用してアトラングラムに順次埋納されていったのではないかと疑問も持たれるようになった。

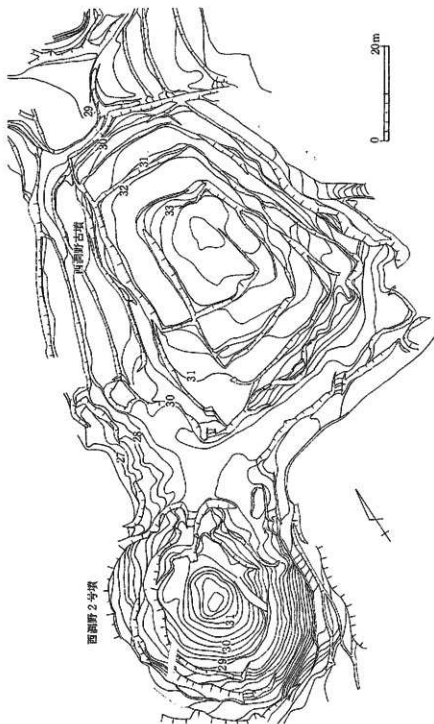
その高まりというのは、直径20m×26mの不整隅丸長方形を呈した丘頂の範囲で、区画としての規則的形態はとっていないようである。ここに3基の埋葬施設がそれぞれ主軸を異にして確認され、その位置も離れていた。しかも従来分かっていたものと今回のものを合わせて3基であるが、あくまでそれはトレンチの範囲内であることや、伝聞による南北方向に主軸をもった石棺の存在などによってまだ幾つかの埋葬施設が埋もれている可能性もある。

埋葬直後の本来の地表面は少なくとも現在より1mは高かったと考えられるものの、全体としてかなり広くなるし、高さは殆どないところから古墳というより丘の頂部を利用して随時埋設されていったとみたがよいのかもしれない。

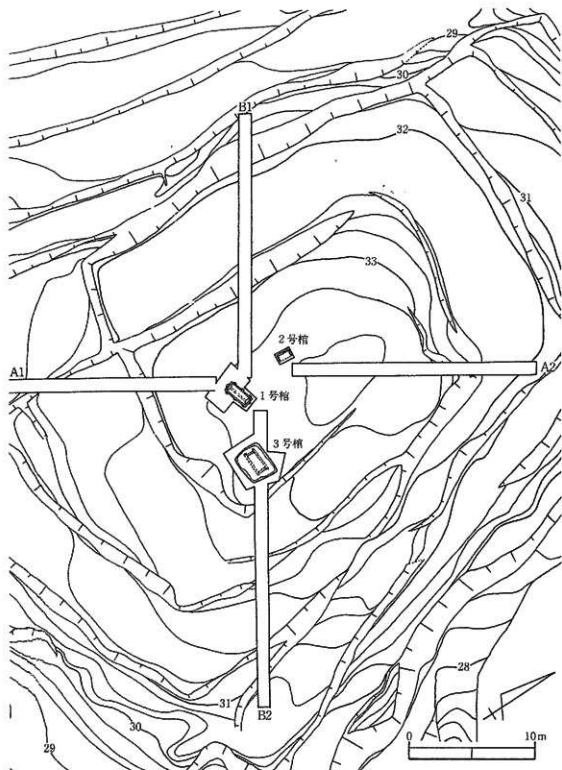
ただ、トレンチにおける地山面の若干の変化点が数カ所で確認できるところから、あえて古墳としての範囲を推測するとすれば径20m前後の規模が考えられよう。

2. 1号棺

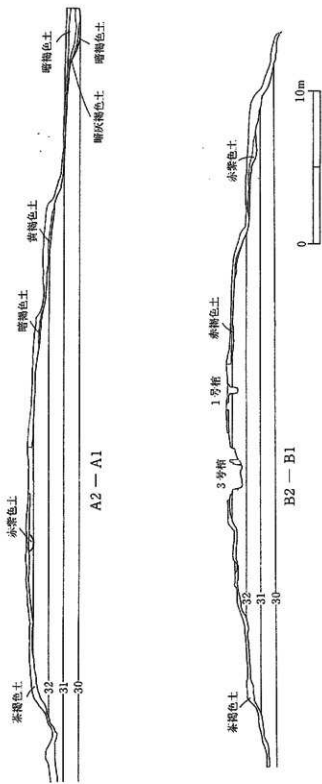
屋根形の棺蓋が露出していたもので、富樫氏による調査の折には、棺蓋は仰向けにされてい



第3图 西洞野古墳・西洞野2号墳地形測量图 (1:800)



第4図 西洞野古墳地形測量図 (1:300)



第5图 西洞野古墳土層断面图 (1:250)

たとい、かなり早い頃に盗掘を受けていたものようである。

この遺構は石蓋土塋の一種であるが、棺蓋に屋根形を呈する阿蘇溶結凝灰岩製の削り抜き石蓋をもつ。長さ205cm(突起を含めれば215cm)、幅は88cm(突起を含めれば99cm)で、高さは34cmを測り、蓋の内側には通有の舟形石棺棺蓋と同様のU字形の削り込みがなされている。従来、屋根形をなす形状から家形石棺の蓋の部分を利用した土塋であろうと考えてきたが、むしろ舟形石棺としての要素が強いと見るべきで、今後は舟形石蓋土塋として訂正し統一しておきたい。

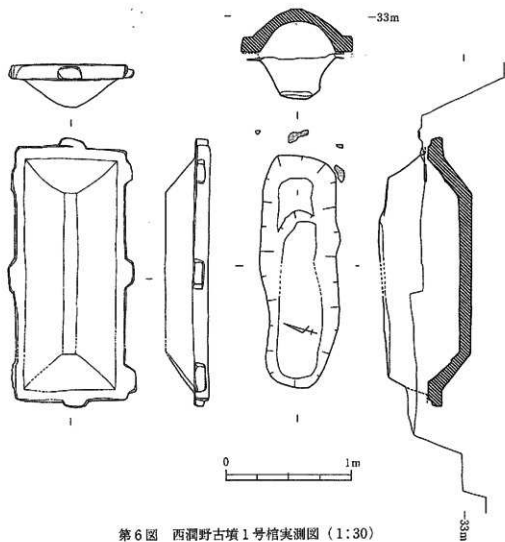
舟形石棺の要素というのは、①棺蓋の長さとの比率が2.3:1で、細長い形状をもつ。②蓋の斜面が丸味を帯びた断面形をなす。③蓋の下端部の造りが削り込みをもたず平坦面を合わせるだけの簡単な造りである(この立岡古墳周辺地域の家形石棺は棺蓋と身との合わせ部分は、削り込みを持つのが一般的で、槍崎古墳2号石棺のような舟形石棺のものは噛み合わせるのではなく平坦面が重なるだけのものばかりである)。④棺身にあたる土塋は舟底状の掘り方で枕状の段も造り出しており、まさに舟形石棺にふさわしい身となっている。以上のような点からみても舟形とするほうが穏当と見られるが、このような舟形石蓋土塋としては、熊本県菊池郡菊鹿町灰塚古墳1号主体¹⁾がある。

西洞野古墳1号棺の身にあたる土塋は、上面で長さ186cm、幅60cm、深さ33cmでU字形の断面をなし舟底状を呈する。東側にあたる部分には枕を意識したと思われる4~7cmの掘り残しがある。蓋との合わせ目にあたる場所には厚さ約1cmの粘土が数カ所に遺存しており、それが、粘土目張りの残存であることが明らかとなった。主軸はN72.5°E。

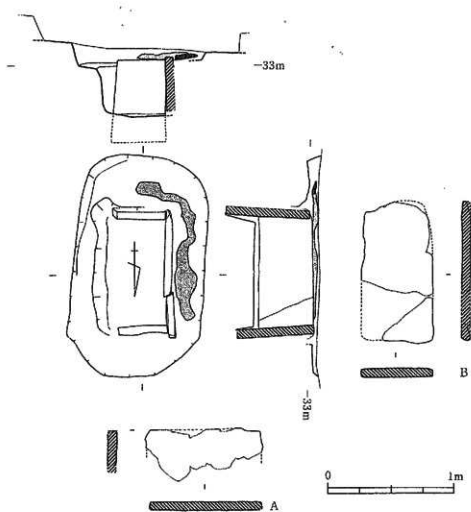
3. 2号棺

1号棺から約3.5m離れ、主軸をN1°Wにとる箱形石棺であり、既に斎藤氏による調査においても確認されている。内法長さ90cm、幅41cm、深さ43cmを測る小規模なものであるが、東側の長側面の1石は抜き取られている。付近にあった石材を接合したところ長さ94cm、高さ最大41cm、厚さ7cmが復原できた(第7図A)。棺蓋も、付近に散在していた石材を接合し、長さ111cm、幅56cm、厚さ7cmの1枚石を用いていたことが明らかとなった(第7図B)。蓋・身を用いられていた石材は阿蘇溶結凝灰岩の板石である。床面は遺存していなかったが、石棺の周辺に赤色顔料の付着した大量の円礫があったため、本来の床からかきだされたものと思われる。墓壇掘り込み面と床面の礫上面との厚さは4cmはあったようであり、これらの、礫を含む土砂を筒にかけて遺物の探索を行なったが、全く何も検出されなかった。

石棺を埋納する為の墓壇は、長さ179cm、幅105cm、深さ53cmで、小口石を置く両側だけは24cmほど深く掘り込まれている。今回の発掘によって、棺身の縁辺に粘土が検出されたので本来、蓋と身の接合部には入念な粘土目張りが施されていたことがわかる。



第6图 西洞野古墳1号棺実測図(1:30)



第7図 西洞野古墳2号棺実測図(1:30)

4. 3号棺

墳丘確認の為に設定した東側トレンチにおいて検出されたもので、見事なまでに石材を抜き取られた箱形石棺であろうと推測できる。僅かに辛うじて残った阿蘇溶結凝灰岩の板石や石屑より、阿蘇溶結凝灰岩板石を用いていたことも分かった。しかも一部では蓋・身の接合部にあたると推測される位置に粘土目張りが残っており、側壁のスタンプが確認できたり北側の長側石が2枚使われていた事も判明した。小口石の掘り込み、残存していた板石の厚さ等から、およそその石棺の大きさ深さ等も推測できる(第8・9図)。

それによると、推定内法長さ177cm、幅53cm、深さ53cmの箱形をなす棺身であり、これに1・2枚の板石が乗っていたのであれば箱形石棺であるし、家形の棺蓋がのっていたのであれば家形石棺であるということになるが、西洞野2号墳の例や内法幅・深さなどから箱形石棺である可能性が高い。

なお、この場所にはもと大きな箱形の石組みがあったということも聞き込んだが、その主軸は南北の方向であったということであり、この3号棺とは直交することになり、あるいは第4の埋葬施設が存在している可能性もある。今回、地中レーダー探査による遺構の確認も行ってみたが、明確には把握出来なかった。今後の調査によって確認することにしたい。

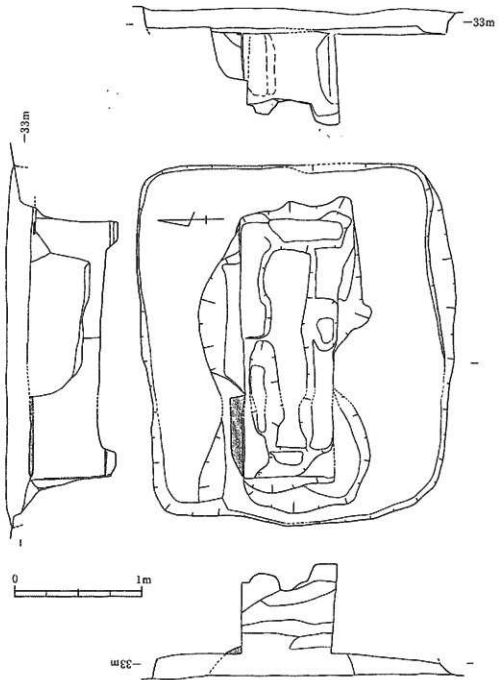
西洞野古墳の3基の埋葬施設においては、昭和34年の調査によっても、遺物は全く検出できていない。

5. 小結

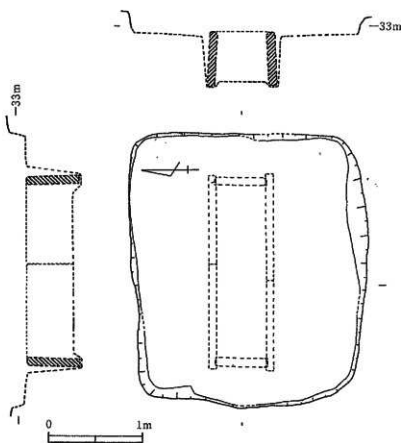
この西洞野古墳は、本文で明らかにしたように、調査が完了した現段階では“古墳”と呼ぶことには若干の問題が残った。とはいっても、明確に古墳ではないとする有力な根拠がある訳でもないので、あえてここでは従来からの呼称である西洞野古墳の名を残し、今回新たに発見された円墳を西洞野2号墳として区分けすることにした。

西洞野古墳の形状は、後世の開鑿によると思われる地形変化によって大きく変わっている。そのため、それが本来古墳としての墳丘を持っていたのかどうかは不明であり、このことは、発掘調査によっても実証できなかった。しかしながら、開鑿によって盛土の削平地均しが行なわれ、本来は古墳としての体裁を保っていたとするならば、径20m前後の円墳ないしは方墳である可能性も全くないわけではない。

今回新たに発見された3基めの埋葬施設である3号棺の主軸が、これまで知られていた2基の埋葬施設の主軸とも全く異なるものであったため、この問題は簡単に決められないようである。伝聞によればもう1基の存在が考えられることから、これら4基を包括する形で墳丘が構築されたとしたらかなり広い墳丘であったことになり、1号棺の蓋石上面が本来の墳頂部から



第8図 西潤野古墳3号棺実測図(1:30)



第9図 西満野古墳3号棺復原図(1:40)

1m~1.5mほどの深さであろうと考えられるので、墳丘の高さは現状より1mほど高かったのは事実であり、その分が削平された事は十分考えられる。いわば、低い墳丘である数基の埋葬施設をもった「古墳」であった可能性は考えられる。もしそうだととしても、同一古墳の墳丘では埋葬主体の方向性にある程度の規則性があるとみるのは当然であり、古墳としての概念では律し切れない面がある。

このような在り方は、いわゆる弥生時代以来の伝統的な集団墓的埋葬方法に似ており、その伝統が古墳時代になっても残

っているということになる。つまり3~4基の埋葬施設を包括するような墳丘は本来なかったということも考えられるのである。

その類例を九州において探すとすれば、時代的にも比較的に近い時期に属すると思われるものとして、近くでは宇土郡三角町戸馳の丸子島古墳²⁾の例がある。八代海に位置する東西16~29m、南北約40mの小島であるが、この島の狭い頂上部には石棺系石室1基、小型壜穴式石室1基、石蓋土壇1基の計3基の埋葬施設がある。5世紀中頃ないしはそれよりやや遡る頃の所産とみられるが、3基はさほどの時期的な隔たりはないものと考えられる。同じく玉名郡東町大字二俣の助吉舟形石棺群³⁾も、3~4基の舟形石棺が極めて限定される範囲に検出されているもので、それらを一括して包括するほどの墳丘はみられず、なおかつ、個々の石棺が墳丘を持っていたとするにはやや狭すぎる場所である。墳丘の詳細調査が実施されていないため断言的なことはいえず、今後に残される。

佐賀県唐津市鏡大字宇木の迫頭石棺群⁴⁾は、50m×40m程度の丘陵頂部に壜穴系横口式石室

・箱式石棺・横口式土槨など13基が主軸を異にして配され、各埋葬施設は鏡や玉類、鉄器などが検出され、時期的には5世紀末～6世紀前半にかけての所産と考えられている。

このように、5世紀前半から6世紀前半頃にかけての段階において、小丘陵上を占拠して集団墓的性格をもったものが存在する。しかしそれらはあくまでもその丘陵自身が完全に独立しており、付近にはいわゆる高塚墳が見られないという点に特色がある。しかし、この西洞野古墳は、丘陵自体が円墳・前方後円墳を包括した墓域に囲まれており、時期的にもそれらの古墳と隔たりをみることが出来ないところからも、これら3者とはやや異質な在り方を示しているといえる。

即ち、同じ立岡古墳群の首長系列に連なる一族で、墳丘を持つほどの力はなかったある段階の一族が、3～4人程度の埋葬を随時行なったものと理解されるのである。今後の発掘調査によって、古墳としての造作を行っていないという証左が得られ、丘陵全体を完掘できればその実体ももう少しは明らかに出来るものと思われる。

(高木)

註

- 1) 坂田和弘「灰塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第114集、1991年
- 2) 三島格他「浜ノ洲貝塚・丸子島古墳」熊本日日新聞社・宇土郡三角町、1987年
- 3) 玉東町史編纂事業に伴う発掘調査を実現。松本健郎・西住欣一郎両氏の教示による。
- 4) 岡崎敬・松永幸男「追願古墳群」『未慮国』六興出版、1982年

IV. 西潤野2号墳の調査

最初の開発計画に基づく発掘届出書に添付された500分の1の地形測量図をみれば、あたかも西潤野古墳の場所を後円部とし、その西側に連なる丘陵の高まりを前方部とした全長約110mの大前方後円墳であるかのようにも思われたところから、両方の高まりを含めた地形測量を実施する必要性が生じ全体測量を進めていたが、その途中の段階でこの二つの高まりはそれぞれ別個の古墳である可能性が高くなってきた。その段階で、既に名称が定着している西潤野古墳と区別するというので、西側のそれを西潤野2号墳の名で呼ぶことにした。

1. 墳丘

地形測量を進めていく段階で、この2号墳が極めて良好な形状を呈する直径20mを越す大きさの円墳であろうということが分かった。しかも墳頂部には盗掘を思わせるような落ち込みもなく、未盗掘墳である可能性も出てきた。

最初に埋葬施設の遺存と墳丘の関係、更には墳丘の範囲等を確認する為に、墳丘には東西、南北それぞれ十文字のトレンチを設定し、随時発掘を進めていった。その結果、等高線の29mを前後するラインが裾と思われ、地山削り出しによって墳丘を形づくる。

2. 近世墓

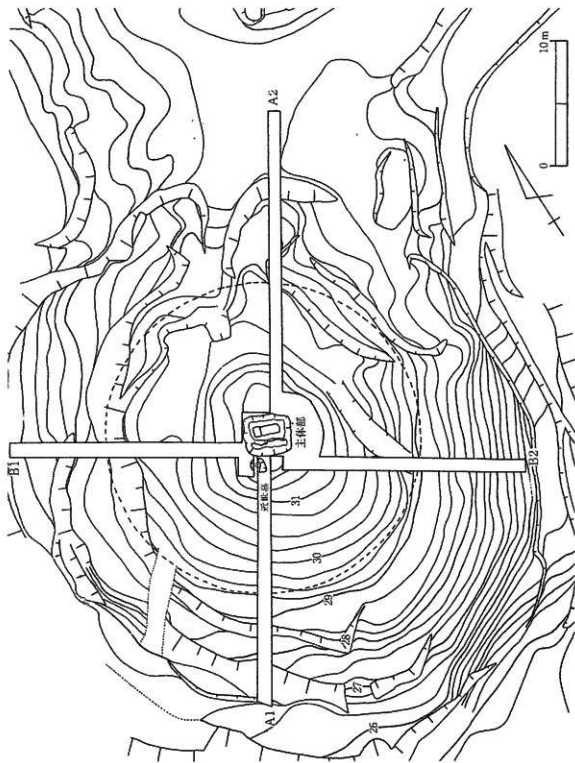
発掘の初期の段階で、墳頂部に110cm×95cmの隅丸方形プランをなす墓壇が検出された。埋土は赤紫色を呈し、墓壇検出面から約20cmの位置に青花碗が発見され、深さ約105cmで皿状の底となった。恐らく墓として利用されたものであり、碗は酒か水などを入れてお供えされたものと思われる。

青花碗(第20図)は、高さ5.0cm、口縁部径6.5cm、高台部底径3.6cmの胴部から口縁上端にかけてほぼ直立する丸型湯呑で、胴部外面の3ヵ所に松葉文様が手書きで描かれている。具須の色は淡藍色であり、江戸後期の肥前系磁器とみられる。

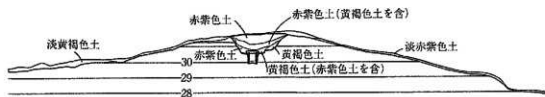
この青花碗から、この近世墓は19世紀前半頃の所産であると推測される。

3. 墓壇

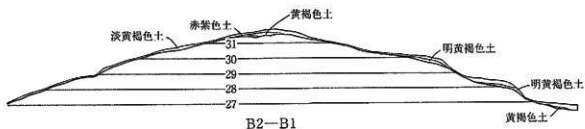
前述の近世墓が発見された以外には、墳頂部は極めて堅く岩盤のように思われたし、明確な掘り込み状の土色変化は見られなかった。しかし、墳丘のコンタは良好にまわり、きれいな円形をなすし、墳頂部から高さ約2～3mの位置には墳丘裾としてよい変化点もみられ、そこから1～2mのフラット面が確認出来、円墳としての条件を整えているところから、改めて墳頂部を掘り広げて埋葬施設の遺存確認に努めた。



第10図 西瀬野2号墳地形測量図(1:300)



A2-A1



B2-B1

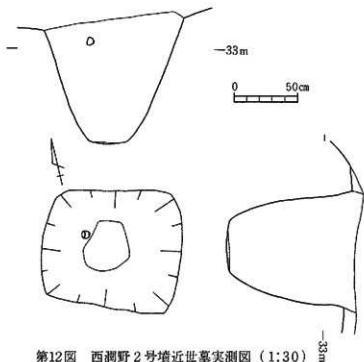


第11图 西洞野2号墳土層断面图 (1:250)

その結果、墳頂部中央が極めて堅い岩盤状をなすものの、それがある範囲に限定されるところから、意識的に岩盤状のものを運んできたのではないかの認識が生まれ、この岩盤状のもの範囲そのものが墓壙ではないかとの見解から、その方針に基づいて掘り下げを行なったところ、その岩盤状土質の範囲が墓壙そのものであることが明らかとなり、その中を掘り進める過程で、そこがこの西洞野 2号墳の埋葬主体であることが分かった。

墓壙は、検出面で東西3.8m、南北3.25mを測る隅丸長方形をなし、そこには赤紫色の岩盤と同種の土が埋め込まれ、その埋土を除去すると、埋葬主体が表れることが推測された。実際、今回設定したトレンチの内、北側トレンチにおいて深さ115cmの位置から阿蘇溶結凝灰岩の板石が表れ、それが埋葬主体部の中心をなす箱形石棺の蓋石そのものであることが判明した。となれば、これまで我々をてこずらせた岩盤状の埋土は、盗掘を意識して意図的に埋められた可能性も出てきたわけで、古代人の古墳に対する意識を推測する上で貴重な調査となった。

墓壙は、逆台形状に掘り凹められ、頂部から深さ110cm付近で西側部分のみ幅55cm、長さ290cmを掘り残してテラスを造る。いわば、片側だけに段がつくもので、この段から更に約10cmで平坦面となり、ここから棺身を据えるために長さ205cm、幅70cm、深さ約55cmを掘り凹めている。いわゆる2段墓壙をなすもので、この2段目の面が箱形石棺棺身上面のレベルであり、蓋石下面の高さでもある。



第12図 西洞野 2号墳近世墓実測図 (1:30)

4. 箱形石棺

墓壇のほぼ中央部に据えられた箱形石棺は、2枚の阿蘇溶結凝灰岩の板石を蓋石とし、その接合部には粘土目張りがなされている。蓋石上端面は水平に近いが、端部に近い部分でやや斜めに切られて丸味をもっているように見え、コーナーは隅丸に仕上げられている。

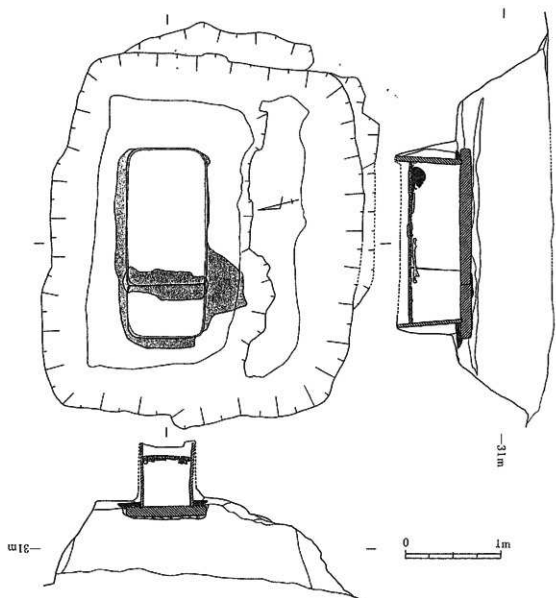
2枚の蓋石は、東側のものがやや大きく、長さ144cm、幅85cm、深さ11cm、西側のものは長さ56cm、幅82cm、深さ11cmで、この2石を合わせて蓋石とし、両石の合わさる部分の上部に長さ89cm、幅24～32cm、厚さ2.5cmの粘土目張りをして、密閉度を高めている。粘土目張りは蓋と身の合わせ目にも充填されているが、その粘土は大きく分けて2回の工程が観察できた。つまり、棺身を据えてからその上端部外側には幅8cmの粘土で取り囲むようにして埋められておりその上部には赤色顔料が塗られ、更にそのまわりを覆うようにして幅22cmくらいの粘土がおかれていた。この粘土には蓋のスタンプがくっきりと残り、粘土がやわらかい段階で蓋石が乗せられたことは明らかであった。

粘土目張りの丁寧な作業を見ても、執拗なまでに封鎖に意が注がれていることが判断できる。

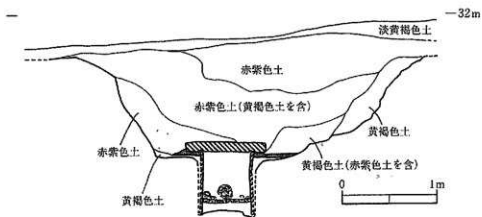
そして、蓋石の下面には、棺身の形に合わせて棺身上端部をきっかりはめ込ませる為の溝が彫っており、石材加工の入念さを窺わせている。この溝の精巧さは目を見張るような技術であり、石の厚さに合わせて溝の幅も変えてあり、コーナー部には、わざと掘り残しを造り出して、蓋をすれば完全に密閉できるようになっている。

身は、内法で長さ167cm、幅50cm、深さ50cmを測る。砂岩製の板石を長側石各2枚、小口石各1枚、計6枚を組み合せたもので、蓋と接する上端部側は面取りを施して、小口石が長側石に合わさる部分の長側石内面には溝が彫りこめられている。2枚使った北側長側石のうちの東側のものはその他の5石と比べ著しく厚い石が使われているが、その厚さに合致するように、これに対応する蓋石下面の溝も幅を広くしてある。棺身を構成している長側石の板石は、長さ129cm、厚さ3.5cm、と長さ69cm、厚さ3.5cmの2石が南側で、一方の北側は、長さ127cm、厚さ3cmと長さ72cm、厚さ6.5cmの2石となっている。長側石の両端は丸く造られ、やや長持形石棺を思わせるようなところがある(第16図)。東側長側石の2石の接点は一方をL字形に造って、他方の石をそれにはめこむようになっている。しかも特にこの石棺で興味を持たれるのは、このL字形に造られた石の内面にそって垂直に、するどい鉄器でつけられたと思われる幅1.5mm、長さ54.5cmの沈線(第17図の破線で示した沈線)があることである。恐らくそれは、L字形切り込みを行なうための割り付け線であると考えられる。

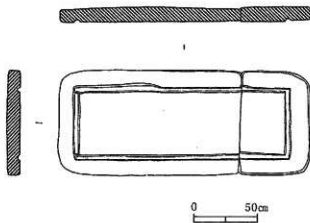
小口の石は東側のが幅51cm、高さ68cm、厚さ5cmで、西側は幅51cm、高さ68cm、厚さ3.5cmである。棺身上端部から深さ52cm位で床面の円礫となり、その厚さが3～4cm、その下には埋土と同じ土が厚さ10cmほど敷かれており、その下面が地山(岩盤)となる。



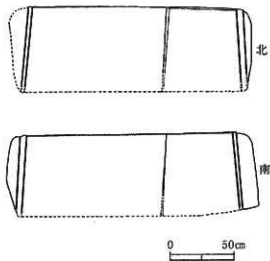
第13図 西潤野2号墳主体部実測図(1:40)



第14图 西调野2号墳主体部
土層断面图(1:40)



第15图 西调野2号墳箱形石棺
蓋石下面実測图(1:30)



第16图 西调野2号墳箱形石棺
棺身側面图(1:30)

2段になっている下部の墓壁に幅2～3cmの隙間を残してぎりぎりに棺身が納められており、長側石の両側端部は張り出しぎみに掘り込まれている。棺底は中央付近がやや高く側石が埋め込まれる所は一段深くなっており、棺材を立ててから棺身を組合せ、背後に掘り上げた土を充填している。ただし、身の長側石が内部に倒れないように、中央部の底には長さ53cm、幅17cm、厚さ3cmの棺材と同じ砂岩製板石を渡してあるが、その板石は床面の下に円礫で覆われて、見えなくなっている。

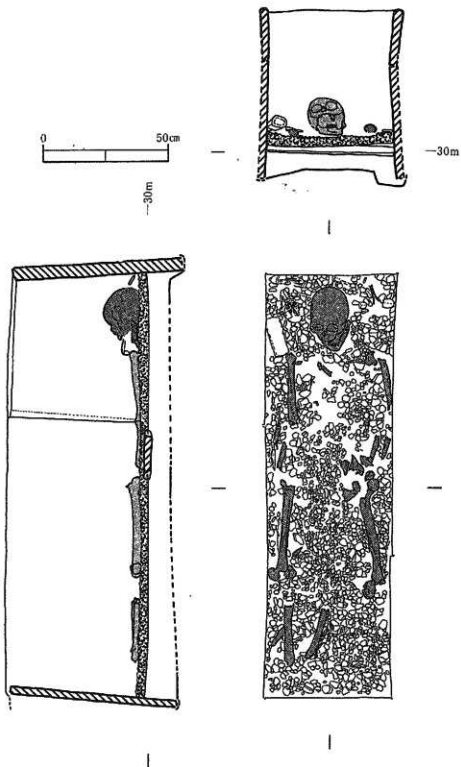
床面に敷き詰められた円礫は、2～3.5cmくらいの大きさのものが一般的であり、付近の小川から運ばれてきたものと思われる。

5. 人骨・遺物出土状態

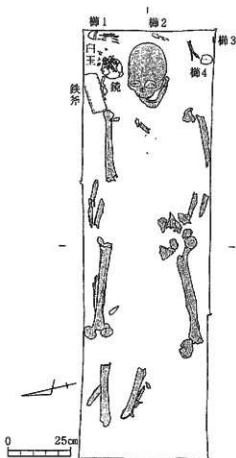
棺内床面には、南に頭部を置いた熟年男性の人骨1体が仰臥伸展葬で埋葬されており、頭蓋骨・上腕骨・下肢骨などが良好な遺存状態で検出された（人骨についての所見は付論1.松下・分部・佐伯論文参照）。推定身長は石棺の長さや四肢骨の状態から推測すれば高くないようである。遺体安置の後、蓋を開けたような形跡もないので、人骨は埋葬時の状態をかなり正確に反映していると思われるものの、左側下肢骨の大腿骨と脛骨の位置が不自然な在り方であった。このことは、立て膝の開脚状態で埋葬されていたものが人骨の腐朽と共に、ずれ落ちて、大腿骨と脛骨が離れてしまったものとも考えられるのである。

棺内内面には酸化鉄が塗布されていたが、人骨の顔面には朱が大量に付着しており、顔を中心にして、朱を塗り、周囲のベンガラと区別するという厳密な行為がこの石棺でも踏襲されており、しかも石棺内部への土砂の流入が殆どないという好条件であったため、厳密な意味での赤色顔料の使い分けを知る上で貴重な調査例となった。顔料についての詳細な分析結果と塗朱の意義については別項（付論2.本田光子・成瀬正和氏論文）を参照されたい。

副葬品は、石棺内のみであり、それも被葬者の頭部を中心とする部分付近のみ集中している。即ち、頭部の周りには堅櫛4本がそれぞれ少しずつ離れてあり、一部は石棺の壁体に付着していた。頭部の右（北）側には2.5cmほど離れて鏡面を上にした素文鏡が置かれ、しかもその上には多数の滑石製白玉が連珠のまま乗せられており、鏡の上には270個ほど数えることができる。玉は鏡と共に固めて取り上げたため正確な数はわからないが、鏡面に乗りきれなかったものは、紐の腐朽と共に周囲のものがずれ落ち、周りの礫の間に落下していた。この素文鏡と白玉は一緒に布のようなもので覆われていたようであり、その残片が鏡の縁に僅かながら遺存していた。この鏡から約2.5cm離れた場所には袋状鉄斧が刃部を東方向に向けて置かれていたが、これには袋部に木質の残存はなく、柄のようなものは付けていなかったようである。この鉄斧（第20図）にも布?のようなものが付着しており、無柄の鉄斧を布で包んで置かれていたことになる。



第17图 西洞野2号墳棺内出土状态实测图(1:15)



第18図 西洞野2号墳棺内人骨・遺物
配置状態 (1:15)

の回りに落下したものがあつた。各白玉は、全てがやや青黒がかつた灰黒色を呈し、大きさも大小いろいろあつて、厚さや形状にかなりのばらつきがあつた。最大のもので上下面の直径3.2mm、胴部最大幅4.1mm、高さ3.3mm、最小のもので上下面の直径3.2mm、胴部最大幅3.2mm、高さ0.5mmとなり、平均的なものとしては上下面の直径3.2mm、胴部最大幅3.4mm、高さ2.1mm。鏡面上白玉は最高37個が繋がつた状態で、その鏡の上のものは出土した状態のまま鏡と共に固めて取り上げた為、現段階においても玉が重なつたままであり、若干の誤差はあるかもしれないが約270個を数えることができ、鏡面から落下した507個と合わせると、総数としては約777個を数える。全体を繋がつた場合の長さは不明であるが、500個では96cmとなるところから、おおよそ148cmにはなるものと思はれる。

これをネックレス状に二重にして首に懸けるとすると37cmとなり、ちょうど良い長さとなる。

6. 出土遺物

(1). 素文鏡

鏡面に白玉が連珠のまま乗せられた状態で発見された鏡は、本来、玉と共に布帛で包まれていたようであり、面径7.65cm、約2mmの反りをもつ仿製の凸面鏡である。高さ約3mmの鏡縁から低い斜縁部となつてその一段下がつた内区には2mm幅の歯文が0.9mm間隔にぎつしりと描かれている。表面の錆の付着によってはっきりはしないが、歯文帯の内側にある幅1.2cmの主文様部には何等の文様も認められない。鏡の中心部には円圈座に囲まれた高さ0.6cmの鈕があり、鈕孔は摩滅しているようである。

この種の鏡をどのように呼称するかはやや難しい点もあり、歯文鏡とよぶむきもあるかも知れないが、内区と外区の境にある歯文帯は主文様部ではなく、あくまでも主文様は素文のままであるという点から、これを素文鏡とよぶことが適切であろうと思はれる。

(2). 白玉

滑石製白玉は、被葬者右側の素文鏡の鏡面に乗せられていたものとそれに乗りきらずに、そ

この事から考えてもこの白玉は首飾りとして作られたもので、埋葬にあたって首にはつけないで、素文鏡鏡面に繋がったままのものを束ねて置いたものと理解したい。

(3). 豎櫛 (第20図)

棺身東側の人骨頭部の回りから4個の豎櫛が出土した。櫛と頭部の間には若干の距離があり、それらは人骨頭部をとり囲むように、歯部を頭部側に置く。1はムネの一部が小口に接し、歯先が頭部を向いている。また、2-4はムネの一部が小口や側壁の床面上6-8cmの位置に付着しており、埋葬後棺内に大きな変化がなかったものと考え、これらは小口・側壁に立てかけられていたものと思われる。

豎櫛はムネ部分の漆膜と歯部の一部が残っていた程度であったが、4個ともに同形態のものと思われ、基本的には15本前後の竹箴を縦糸で束ねてU字形に屈曲させ、それを樹皮状のものと巻き縛って結束させる。歯部は、根元の両面に横棒を添え、歯の間を通した糸？でお互いを縛って固定している。そして最終的に漆を塗ってムネ部分を固めているようである。

1は出土状態から全長12.5cmと思われ、箴16本を束ねており樹皮状の巻縛と歯を固定する横棒と巻糸の痕が残っている。2はムネの巻縛と歯の一部がわずかに残っている。3はムネ外縁部分で縦糸の痕が明瞭に残っており、漆膜の値で幅2mmで0.7mmの厚みがある。4は全長で13.4cmと思われ、箴は15本を束ね、縦糸と樹皮状の巻縛で結束していて、歯を固定する横棒と巻糸の痕も一部残っている。また、歯は先端部の形状は不明だが、現存部分での長さ7.4cmを測り、漆は認められない。

第2表 西調野2号墳出土豎櫛計測表

豎櫛 No		1	2	3	4
全 長		(125.0)	---	---	(134.0)
箴	本 数	16	---	---	15
	厚 さ	1.4	(1.2)	1.5	1.6
ム ネ 部	長 さ	40.9	---	---	(47)
	幅	51.0	---	---	(54)
	厚 さ	2.0	---	2.5	1.8
	巻縛の幅	11.5	10.0	10.5	12.2
歯 部	長 さ	(84.1)	---	---	74.0
	幅	2.0	2.4	2.1	2.0
	厚 さ	0.5	0.5	0.8	0.7
備 考	横棒の長さ47.0mm 巻糸1本の幅1.1mm				

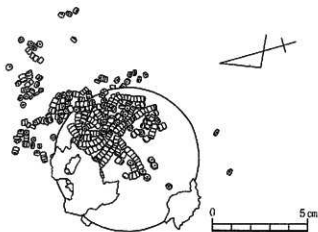
※箴の厚さ以外は漆膜上からの計測値。() は推定。[単位はmm]

(4). 袋状鉄斧

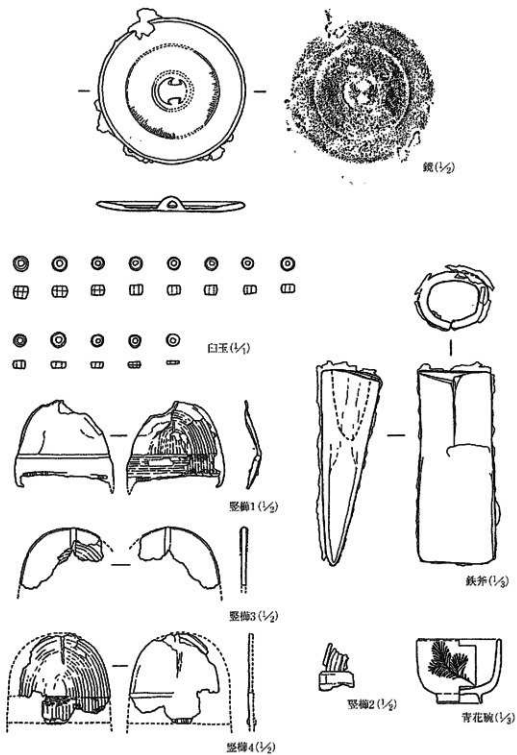
人骨北側の右肩部分にあたる付近に置かれていたもので、刃先を東側に向け、袋柄の部分を西に向けていた。この袋部の内側には木質の遺存はなく、本来、柄は付けてなかったと考えたがよからう。

鉄斧は、長さ14.9cm、刃部幅5.8cm、刃部厚さ0.2cm、袋部外径幅5.9cm、袋部外径高4.4cm、袋部の深さ5.37cm、重量980gあり、袋部を両側から折り曲げて合わせた鍛造品である。鉄斧の上面には布帛のようなものが付着しており、もともとこの鉄斧は布で包んであったものと思われる。

しかしながら、工具とされる鉄斧が、本来的には刀や剣のような武器が置かれて当然の場所の被葬者の右肩付近に置かれている事実をどのように考えていいのか理解に苦しむところがある。その意味を考えるとすれば、(1)この被葬者が工具としての鉄斧を日常的に使用するような人であったのか、(2)この鉄斧そのものが武器としての機能をもつものであるのか、などが考えられるが、その結論はここでは保留しておきたい。



第19図 西潤野2号墳、鏡・玉出土状態 (1:2)



第20图 西洞野2号墳出土遺物実測図

7. 小結

西調野2号墳が未盗掘であったことは、古墳の埋葬内容を知る上で極めて貴重な資料を提供することになった。なぜこの古墳が盗掘の憂き目に会わなかったかは、恐らく古墳造りに関わった人々の意図的な仕業であったとみたい。即ち、同一丘陵で平地に近く古墳としての形状を保っている2号墳が盗掘されず、1号墳の方が石材まで抜かれ徹底的ともいえる暴かれ方であって、その差は余りにも大きいからである。

調査のはじめの段階では、岩盤と見誤るほど堅い埋土に我々自身もあるいは古墳ではないのではないかと疑ったほどであり、掘削した土なら黄褐色の頁岩風化土であるはずなのに、墓室内の埋土は赤紫色の頁岩風化土で、それほど遠くない場所から意識的に堅い土を選んで運んできたとしか考えられない。この古墳には恐らく何回かの挑戦があったものと思われるが、堅い岩盤土の効果があってこれまで盗掘を受けることなく埋葬当時の状態で発掘することができたものと思われる。

今回の発掘によって古墳を訪れた人々の関心を集めたのは何といっても、極めて精巧に施された石棺蓋下面の削り込みであった。棺身の形状に合わせてきっかりと噛み合うように彫りこんだ加工技術は、まさに現代の木工技術を想起させるもので、これほど精巧に蓋身の接合に氣をつかった例はこれまで恐らく知られていないのではないかと思われ、当時の石材加工技術がいかに高度であったかを知ることができる貴重な古墳であった。

調査者の一人木下は、この蓋の細工について次のように考えている。つまり棺身をいったん墓室内に入れて組み立てたのち、その身を再び取り出して、下面を上に向けた蓋石の上に逆置いて仮に組み合わせて、蓋と身の合わさる部分に割り付け線を描き、その線に沿って、蓋に溝を彫ったものであろうと。しかもその線が残らないのは、蓋と合わさる棺身の上面は面取りがなされている為に蓋の溝も身の面取りに合わせて棺身よりやや幅を広く逆台形状に彫ってしまうため線は必ず削り取られてしまうと見られるのである。そのような理由で、この線は蓋には残っていなかったが、棺身の北側側壁の内面に残っていた幅1.5mm、長さ54.5cmの細線と同様のものであったと考えられる。

棺身の造りも丁寧で、棺身北側壁の内の東側一枚を除けば、全て厚さ3.5cm位の板石を組合せて、この種の箱形石棺としては他にあまり例のない薄い造りとなっており、棺身長側辺の板石にはいくつか亀裂が入っている。石と石の合わせ目は丁寧な削りがなされていたり、面取りが施され、長側石の両端上面は蓋石の溝に納まる部分を突出させ、それ以外は角を丸くしており、あたかも長持形石棺に似た側面観を呈する。棺身も緻密な削り付けに基づいて加工がなされたのであろうが、北側側壁にやや計算違いによると思われる細線が残っていたおかげで、石棺加工技術の一旦を垣間見ることができた。このような「線引き」の機能については、石材を加工する際の粗作り段階で行なう技法としての位置付けが提示されている¹⁾。

この「線引き」とはやや機能の異なるものとして、組合せ式箱形石棺の長側辺内壁に、小口石を合わせる位置を示すための細線を施したものとして福岡県九隈山古墳の石棺²⁾がある。また、石棺ではないが、近年、横穴式石室の内側壁に石室構築の際の作業基準とする為に朱線を施したものが群馬県吉岡村南下A・E号墳³⁾において確認されている。本例と合わせ、古墳の構築を考える際の貴重な資料であり、今後の類例の増加をまちたい。

本石棺の特徴として、石材の問題も避けることができないであろう。棺蓋に用いられているのは阿蘇溶結凝灰岩の板石であり、これを2枚合わせて蓋石としている。色調は一般的な阿蘇溶結凝灰岩の灰黒色ではなく、むしろ灰白色を帯びた色調で、宇土半島基部東部や南部付近の舟形石棺・家形石棺、あるいは横穴式石室においてもよく見られるものである。ところが、この種の色調の阿蘇溶結凝灰岩は、九州においては意外に見かけることのないもので、数箇所でき確認されていない。筆者は、これらの宇土半島基部の古墳に用いられている灰白色の阿蘇溶結凝灰岩は、宇土半島の宇土市網津町の網津川中流域一帯で採石されたものと考えている。

一方、棺身の石材は蓋とは全く違う砂岩であり、明らかに違った場所から持ち運ばれたものとなる。砂岩そのものは西潤野古墳のある丘陵においても頁岩と互層となって入っているが、石棺材として使えるようなものはなく、この石棺材も他地から運ばれたものと理解される。宇土半島基部や宇土半島の古墳・石棺において、これと同種の砂岩を用いた例は相当数あり、古墳時代において大量に石材として取り出された場所があったに違いないと考えられる。その場所を限定するのはかなり問題があるが、それらの多くが天草の何処かであったことは間違いないものと思われる。飛躍を恐れずにもう少し限定的に述べるとするなら、筆者は宇土半島先端部から大矢野島、天草の上島北部を含む付近一帯であろうと考えている。

つまり、蓋と身はそれぞれ別の場所で取り出され、基本的な形状に加工されて古墳のある場所に運ばれ、そこで細部加工がなされて組み合わされたものと見られる。蓋と身に全く違う石材が用いられた箱形石棺は熊本県下ではほとんど知られておらず、石棺製作者の系譜や構成を考える上で興味ある問題を提起している。しかしながら、畿内地方においては蓋と身が全く異なる石材を用いた例⁴⁾や、数枚の蓋石で全く異なる石材が用いられているという指摘⁵⁾もあり、実際には、一つの古墳において数種の石材を用いて堅穴式石槨や横穴式石室を構築することは一般的なことではある。

なお、今回の発掘調査においては、墓境内や石棺裏込めなどに石棺材の細片・切り屑などがないか注意して観察したが、そのようなものは発見されなかった。

この古墳に限ったことではないかもしれないが、今回の調査によって完璧なほどまでに密閉することに気を使っていることが明らかとなり、石棺内部には殆ど土砂が流入していなかった。そのため、良好な状態で人骨が検出されたし、赤色顔料の散布の仕方もよくわかった。人骨は熟年の男性で左側頭頂骨に骨瘤、いわゆるタンコブがあり、しかも左足がやや不自然な状態で

配されていた。赤色顔料は人骨頭骨上には水銀朱が塗られ、それ以外の棺内には酸化鉄が塗られているという使い分けがあり、朱は採取場所によって粒度が異なるらしい。

出土遺物としては素文鏡1面、滑石製白玉約777個、堅筒4本、袋状鉄斧1個があり、中期古墳として典型的な様相を示している。なかでも、滑石製白玉は、その材質・形状からみてもそのほとんどが同一の場所で作られた一括品である可能性が高く、伝世を考える必要はないと考えられる。白玉の9割は、側面部に完全な稜線を引くことはできないものの、それに近い膨らみを残している。しかし、高さの低いものには膨らみはなく、形態にやや違いが認められるのも事実である。

この古墳から約15km離れた宇土市城2号墳からは琴柱形石製品2個・管玉10個・白玉10個⁶⁾が出土しており、それらは全て同質・同材のセットとして入手されたことが明らかである。その白玉10個の形は全てが均質な膨らみをもつ側面鏡であり、白玉に膨らみを持たないものが混じった西沢野2号墳の方が新しい要素を備えているものと理解される。

白玉は、素文鏡の鏡面にひと固まりで置かれていた。今回報告書作成にあたって、素文鏡を検討する必要性を感じ、国立歴史民俗博物館のご厚意を得て全国の素文鏡のリスト⁷⁾を送っていただいて検討したところ、予想以上に素文鏡と滑石製品との共存関係が多いことがわかった。即ち、全国85面(出土遺構65)の古墳時代に属する青銅製の素文鏡のうち、伴出関係の明らかでない45遺構の約三分の一にあたる14の遺構から滑石製模造品・勾玉・管玉・白玉などが伴っていることが判明し、時期的にはいわゆる古墳時代中期に属すると判断されているものが半数の22件ある。また、遺構の性格としては65遺構のうち、墳墓や古墳が30箇所(46%)、集落16箇所(25%)、祭祀遺構10箇所(15%)、不明9箇所(14%)となっている。

一つの遺構として最も数が多いのは和歌山県の大谷古墳であり、ここからは5面の四鈴素文鏡を含め14面の素文鏡が出土している。その次が3面を出土した鳥取県長瀬高浜遺跡の15I-SPO1で、明確な出土状態ではないが静岡県宮脇遺跡からも5面が出土している。

鏡の大きさとしては、85面の内の、面径の不明な15面を除いて検討してみたところ、最も小さいものとして東京都足立区伊興遺跡土抗SK072の0.5cmがあり、最大のものでは京都府亀岡市篠町辨塚古墳出土の10.1cmのものである。面径2cm単位で数量を検討してみたところ、2.0cm以下2面(3%)、2.1cm以上4.0cm以下42面(60%)、4.1cm以上6.0cm以下11面(16%)、6.1cm以上8.0cm以下10面(14%)、8.1cm以上10.0cm以下4面(6%)、10.1cm以上1面(1%)とり、圧倒的に2~4cmの大きさであることがわかるし、もっと拡大すれば2~8cmの範囲に90%が集中することになり、この種の鏡が如何に小さいという点に特色があるかが容易に判別できるのである。

このことは、権力を象徴するものとしての鏡に異常なまでに情熱を注いだ前期古墳社会から、鏡の持つ意義が次第に薄れて徐々に変質を遂げた倭鏡製作の一断面を表しているものと理解さ

れる。

ただ、古墳時代前期において既にこの種の小型素文鏡が作られ、4世紀段階において呪具としての鏡の機能の違いが鏡の形態差として表れているという見解⁸⁾もある。かなり早い段階から、光輝だけでなく、神に奉獻される祭器としての機能を持った鏡が作られるようになっており、祭器としての比重が5世紀段階以後、急激に大きくなり、鏡が大幅に変質を遂げるようになったことは確かなようで、その段階に本例は属する。

(高木)

註

- 1) 和田晴吾「石工技術」『古墳時代の研究』5, 生産と流通Ⅱ, 雄山閣出版, 1991年。
- 2) 柳沢一男「丸腰山古墳Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集, 1986年。
- 3) 松本浩一・桜場一寿・右島和夫「石切組積穴式石室における構築技術上の諸問題—いわゆる朱鏡をもつ南下E号古墳を中心として」上・下『群馬県史研究』第11・13号, 1980, 1981年。
- 4) 小林行雄「河内松岳山古墳の調査」『大阪府文化財調査報告』第5輯, 1967年。
- 5) 奥田尚「組合式家形石棺と石工集団—二上山系石材を例として—」『古代学研究』第101号, 1983年。
- 6) 三島格他「城二号墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第3集, 1981年。
- 7) 国立歴史民俗博物館日本出土鏡データ集成。
資料探索にあたって国立歴史民俗博物館考古研究部設楽博己氏のご協力を得た。記して感謝申し上げる次第である。
- 8) 田中琢「鏡—権力とまつり」『日本原始美術大系4, 銅鏡鏡』講談社, 1977年。

ウロノ V. 潤野2号墳の調査

宇土市立岡町中潤野に所在し、潤野古墳の南約70m、潤野3号墳の西約100mに位置する潤野2号墳は、3号墳と同様に丘陵の尾根を巧みに利用した地山削り出しの古墳である。墳頂部のレベルは56.25mを計り、比高差では潤野古墳より約20m高く、3号墳より約14m低い。

当初、墳丘確認のためのトレンチをいれる予定であったが、3号墳の調査で予想以上に時間がかかったために測量調査だけしか行わなかった。

1. 墳丘

この古墳の周囲は畑地造成等による地形の改変を受けておらず、築造当時の姿を良好な状態で残しているものと考えられる。また、墳頂部には盗掘痕らしきものも見当らず、潤野3号墳や西潤野2号墳と同様に未盗掘の可能性が高い。

墳頂部は、最高位で56.25mを計り、そこを中心に径8～7mのはほぼフラットな面がある。墳丘は高さ2m程と低く、周溝や段築などはなく、葺石や埴輪等も観察されない。また、マウンドの南東側（尾根に沿って高位）には高さ1m弱の高まりがあり、北西側には墳丘裾に沿って三日月状に平坦面がある。地形の状況としては、規模こそ違うものの潤野3号墳にかなり近い。

墳形については、円墳とするにも前方後円墳とするにも測量調査だけでは根拠に乏しい。かりに円墳と想定した場合、墳丘裾は54.50mのレベルと考えられ、長径19m・短径15.5m・高さ2m弱の楕円状となる。しかし、地形は3号墳と同じような様相を呈しており、前方後円墳の可能性もあるといえる。この場合、北西側裾を54.50m、北東・南西の裾を54.00m、前方部ははっきりしないがおおよそ54.00mライン付近と考えると、全長約29m・後円部径19m×17.5m・後円部高さ2.25m・前方部長約10m・前方部高さ0.5m・後円部と前方部の比高差は1.7mという数値になり、主軸はN49°Wをとることになる。

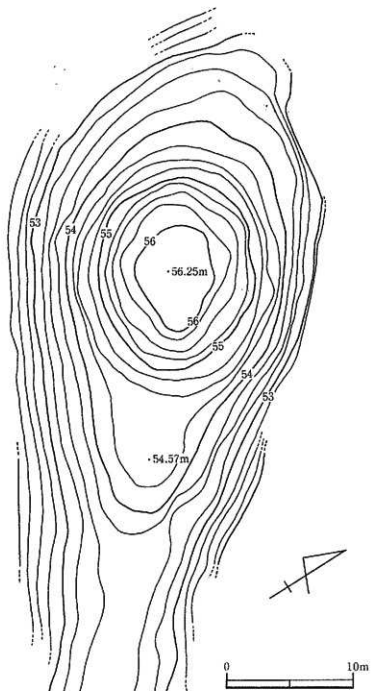
2. 小結

2号墳と3号墳の地形測量図を見比べてみれば判るように、両古墳はかなり似通った形をしている。このことは両古墳の位置からみても無関係とは言いがたく、3号墳のような形態の古墳のひとつであることは間違いないだろう。このような墳丘形態をどう考えるかは、第VI章第6節で触れたい。

築造の時期としては、古墳の立地及び墳形から、潤野古墳・西潤野古墳・西潤野2号墳より明らかに先行するとみられ、5世紀の前半を下ることはまずないと考えてよからう。潤野3号墳との前後関係については、立地条件からみると3号墳が先行しそうではあるが、内容が明ら

かでないこともあるので、3号墳の直後もしくは直前と考えておきたい。

(元松)



第21図 西潤野2号墳地形測量図(1:300)

ウロノ VI. 潤野3号墳の調査

宇土市立岡町中潤野に所在する潤野3号墳は、立岡丘陵の最高所（墳頂で標高70m）に位置する。本来、3号墳の東側はもう少し高くなっている、そこが丘陵の頂部であったが、ゴルフ場造成の際に削り採られ現在のような地形になったようである。3号墳の墳頂からは、北西に現在の宇土市街地を隔てて有明海と熊本平野、南西には松橋町の市街地を隔てて不知火海（八代海）と八代平野を望むことができる。

この3号墳と同じ尾根には、西約100mの位置に潤野2号墳、そこから更に北約70mの地点に潤野古墳がある。また、3号墳の西から岐れて南に低く延びた丘陵の先端部には西潤野2号墳があり、そのほぼ中間に西潤野古墳がある。

今回の調査は、墳丘の確認と主体部の存在確認を目的として実施したものであり、墳丘については地形測量とトレンチによる確認、主体部については粘土層を検出したところで発掘をストップした。

1. 墳丘

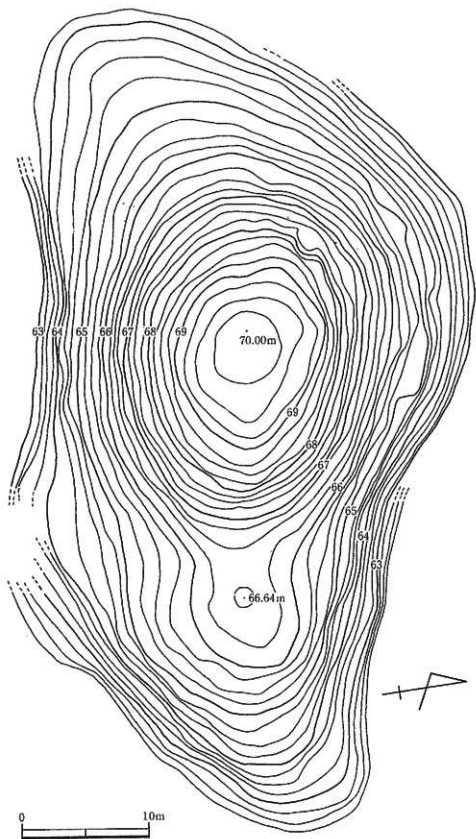
墳丘から僅か数mのところまでゴルフ場になっているとはいえ、樹木の抜痕を除き人工的な地形の改変を免れていた。これは、丘陵自体が細く畑地等にするには不向きであったことと、この部分がゴルフ場用地として買収されているながらその造成範囲からはずれ、周辺の開発が進む中に30年ほど手付かずの状態であったことが幸いしたものと思われる。

（※報告の都合上、前方後円墳と仮定したところで前方部・くびれ部・鞍部等の用語を使用する）

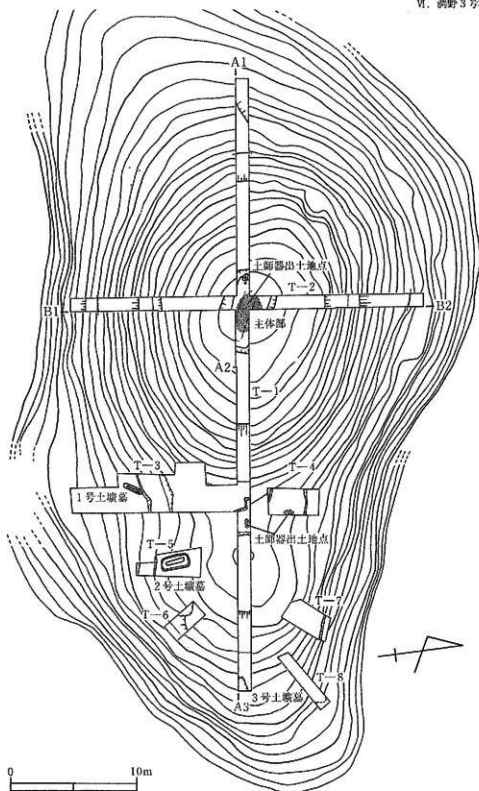
墳丘を確認するために、墳丘を東西に縦断するかたちでT-1（長さ48m×幅1m、以下同じ）、南北に横断するかたちでT-2（27.3m×1m）を設定した。この他、東側の高まりに前方部の可能性を考えて、くびれ部南側にT-3（13m×2m）、くびれ部北側にT-4（4m×2m）、前方部南側にT-5（5m×1m）とT-6（3m×1.5m）、前方部北側にT-7（4m×2m）とT-8（5.5m×1m）を設定し、必要のある部分を拡張しながら調査を進めた。

墳丘の盛土は、最も厚い主体部周辺で約90cm、部分的には地山が露出しているところすらある。土層としても後円部墳頂を除くとほとんど1層よりなっており、地山を削り出して造営したものである。墳丘には顕著な段築や周溝は認められず、埴輪や葦石等の施設もない。また、くびれ部の南側と後円部の南西側には若干の平坦面がある。

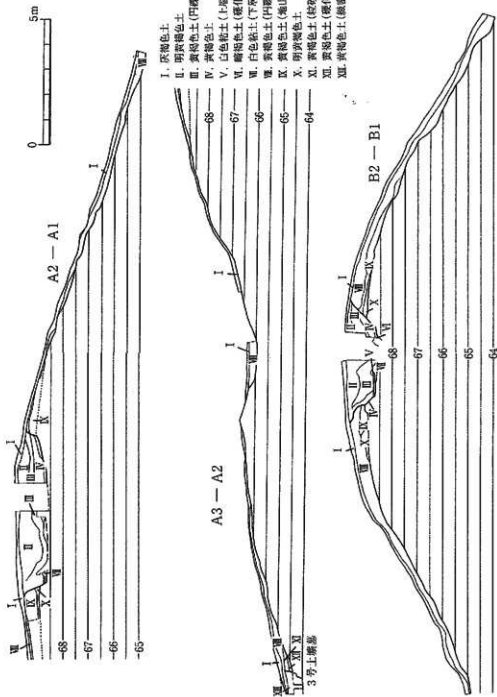
墳丘ラインは、後円部西側ではT-1西端から約6mの地点、北側ではT-2北端から約0.8mの地点、南側ではT-2南端から約2mの地点に明確な変化点があるので、そこが墳丘裾となるようである。東側では、T-1東端から約14mの地点に変化点があり、前方後円墳とした場合の鞍部、または円墳とした場合の裾となる。問題は墳丘（後円部）の東側にある高さ



第22图 酒野3号埧地形测量图(1:300)



第23図 洞野3号墳遺構配置図 (1:300)



第24図 酒野3号墳土層断面図 (1:150)

1.5m程の高まりである。調査では、T-1のほかにT-3からT-8までの6本のトレンチを設定したのだが、明確に裾となり得るラインは確認できなかった。ただし、T-1東端から3m、T-3南端から7.5m、T-5南端から1.5mの地点には弱い変化点があり、前方後円墳とした場合の範囲とも考えられる。また、T-3・T-4・T-7・T-8にある段差の大きな変化点は、地山の断層によるものと考えられ、墳丘裾のラインとはならない。

この墳形を前方後円墳と考えた場合、主軸はN79°Wをとり、その規模は全長39m・後円部径28m(主軸平行)×24.5m(主軸直交)・後円部高さ5m・前方部幅約11m・前方部高さ約1.6m・後円部と前方部の比高差は3.4mを測る。墳丘の形態的な特長としては、①後円部が卵形を呈する②後円部と前方部との間に明確なくびれ部がない③前方部の範囲が不明瞭な点が挙げられる。円墳と考えた場合には、長径28m×短径24.5m・高さ5mの楕円状となり、特徴としては、①墳丘が卵形を呈する②東側に造り出しとも言えそうな高まりを削り残す点が挙げられよう。

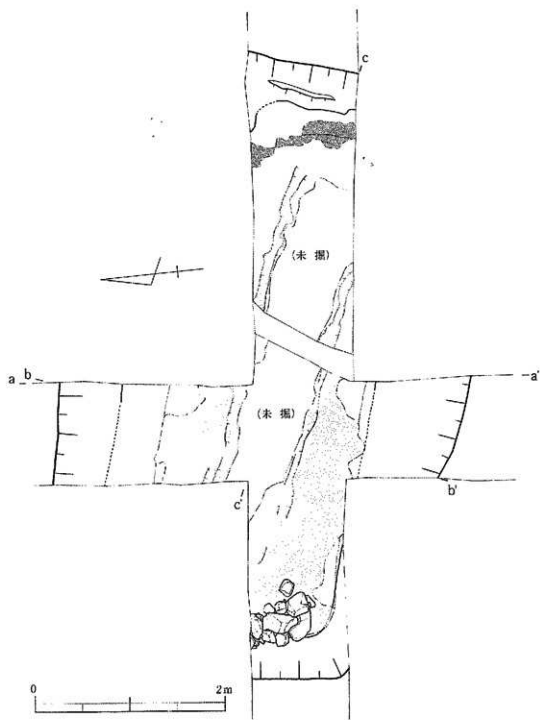
また、古墳の周囲に複数の埋葬施設があることも特徴の一つである。トレンチにかかった僅かな部分だけで3基を確認しており、さらにくびれ部の南側と後円部の南西側にある平坦面が未調査であることを考え合わせれば、全掘るとかなりの数にのぼるものと思われる。土壌の名称は、検出した順にT-3の土壌を1号、T-5の土壌を2号、T-1東端の土壌を3号土壌墓と命名した。詳細は第4節に譲るが、2号だけが石蓋土壌墓で、1号と3号は木蓋土壌墓であると思われる。

2. 内部主体

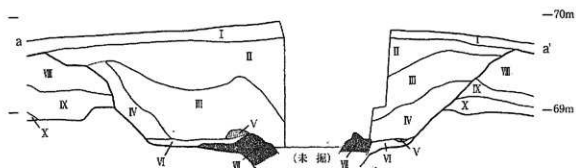
(1). 墓塚と粘土椀

後円部を縦横断するT-1とT-2にかかった部分のみの発掘で全掘していないが、墓塚の平面形はほぼ長方形で、その規模は検出面で東西約6.2m・南北約4.2m、底で東西5.5m・南北2.7mを測り、墓塚上面からの深さは1.2mで、断面逆台形状を呈するものと思われる。

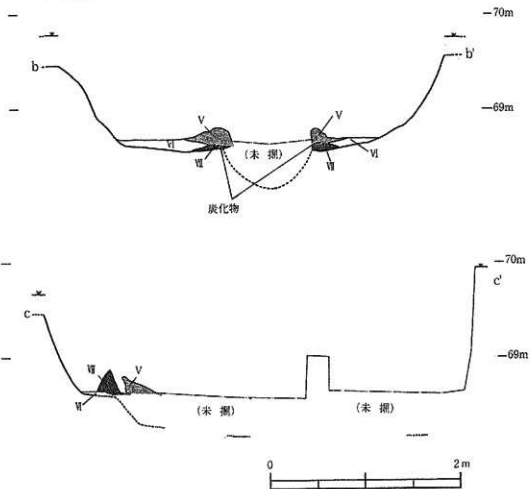
墓塚については、まず地山に盛土(X・IX・Ⅷ層)を60~80cm盛って墳丘を一旦完成させ、その後、地山まで逆台形状に120cmほど掘り下げているようである。その墓塚底のほぼ中央には、ピンボールによる部分的な探査ではあるが、棺床とするための幅約90cm・深さ約40cmの断面半円状の掘り込みがある。その掘り込みをとり囲むかたちで、東西約5.3m・南北約2mの範囲に白色粘土が残っており、これが粘土椀の範囲となろう。この粘土(V層)の末端は、ほぼフラットな厚さ5~10cmの硬化された層(Ⅵ層)の一部を覆っており、さらにこの硬化層の下には別の粘土(Ⅶ層)がある。この上下2層にわかれた粘土は、下層が棺身を固定するためのもの、上層が棺蓋を覆うためのものと考えられることができる。粘土椀の中央部には、Ⅲ層の土と共に大量の粘土が落ち込んでおり、埋葬当時は棺蓋が粘土によって覆われていたようである。また、粘土には含まれたⅥ層の性格については、棺身を下層の粘土で固定した後、周囲に土を敷きそれを



第25圖 潤野3号墳主体部実測図 (1:40)



- | | | |
|---------------------|----------------------|---------------------|
| I. 灰褐色土 | V. 白色粘土(上層) | IX. 黄褐色土(地山ブロックを含む) |
| II. 明黄褐色土 | VI. 暗褐色土(硬化) | X. 明黄褐色土 |
| III. 黄褐色土(円礫を僅かに含む) | VII. 白色粘土(下層) | |
| IV. 黄褐色土 | VIII. 黄褐色土(円礫を僅かに含む) | |



第26図 潤野3号墳主体部土層図・断面図(1:40)

固めて整形したものであり、埋葬儀礼のための場として理解できよう¹⁾。

墓墳の埋土は3層よりなるが、墓墳の中央部には木棺の崩壊による土層の陥没が観察される。祭祀に伴う土器は地表下10~40cmの地点、土層で言えば墓墳埋土の最上層(Ⅱ層)上部に含まれている。出土した地点の深さに幅があるのは、木棺の腐朽による崩壊に起因するものと思われる。

また、墓墳西側からは粘土椀を取り囲むような状態で、地山から削り取ったと思われる礫群(直径10~30cm大)が検出された。全体からすると3分の1程度を確認しただけであるが、排水等に関連した遺構であろうか。

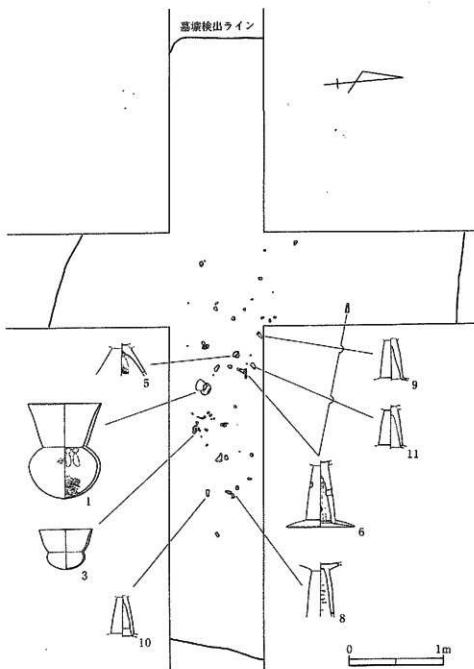
(2). 木棺

木棺については、粘土椀の検出面で発掘をストップしたため不明なところが多い。しかし、木棺に接していたと思われる粘土のスタンプを一部検出しており、また棺床をつくるための掘り方の断面が推定できるので、それをもとに木棺の形態と規模を考えてみたい。まず形態であるが、掘り方の断面形から箱形の木棺とは考えられず、割竹形木棺と考えるのが妥当であろう。その棺の幅については、掘り方の断面(幅約90cm・深さ約40cmの半円状)からある程度推定が可能である。地山の掘り込みと木棺の間には粘土を敷いているようであるが、全体の粘土の量や他の粘土椀の例からすると、中央部における棺の幅はおおよそ70~80cmと推測出来よう。棺の長さについては、西側の小口部が未掘であるために推定することは難しいが、東側小口部の位置から考えると最大でも470cmを超えることはないと言える。ただし、棺床や棺台の大きさと実際に納められた木棺の大きさが違う例もあるのでこれ以上の推測は控えたい。また、木棺の方位については、粘土のスタンプから考えて、前方後円墳とした場合の主軸とは9°ほどのずれがある。

3. 墳頂祭祀遺構

主体部直上で、地表下10~40cmの地点(第Ⅱ層上部)から、人為的に壊されたとも思われる土器群が一括して出土した。トレンチにかかった部分のみの発掘であるが、おおよそ墓墳の中央部を中心とした南北2m×東西3mの範囲に広がっているものと思われる。器種としては、直口壺・高坏・小型丸底壺・器台などがあり、総個体数は20点ほどにならうか。土器はほとんどが破片となっており、ほぼ完形であったのは底部に穿孔のある直口壺の1点だけであった。また、その中の数点は1m以上離れた地点からの出土であるにもかかわらず同一個体であり、前述したように人為的に壊されたともとれるような形跡がある。器種的にも祭祀用に作ったと思えるミニチュアのものも多く、さらに赤みを帯びた独特な色調を呈しており、墳頂祭祀の一例として捉えられよう。

祭祀の時期については、土器が墓墳埋土の最上層(Ⅱ層)に含まれている点から、主体部の



第27図 潤野3号墳墳頂部土師器出土状況 (1:40)

(土器スケールは1:6、土器Noは遺物Noに一致)

埋葬が終了し、土壌の埋め戻しが完了した後と考えることができる³⁾。土器の出土地点の深さに約30cmの幅があるのは、第2節で述べたように、木棺の腐朽に起因する土層の陥没のためであろう。

4. その他の埋葬施設

(1). 1号土壌墓

南側くびれ部の外側で検出された頭位N20°Eをとる土壌墓である。墳丘を意識したために墳丘外に造られているものと思われ、墳丘の構築後の所産と考えてよからう。地山に直接掘り込まれた二段掘りの土壌であるが、実測図を見れば分かる通り、一段目の掘り込み方に特徴がある。墓壙の上端で長さ215cm・幅35(北側)~45cm(南側)・深さ約40cmであるが、一段目の下部を真横に掘り抜けているために、蓋を被せるためのスペースは長さで15cm・幅で10cmほど上端より広がっている。その蓋は残っていなかったが恐らく木蓋であったのだろう。棺にあたる部分は長さ185cm・幅28(北側)~18cm(南側)・深さ約20cmとかなり細長い。2号棺のように床面には枕などは造り出さず、逆に頭の部分を5cmほど掘り窪めている。人骨・副葬品・赤色顔料などは見当らなかつた。

この土壌墓のように極端に細長い形状を呈する埋葬施設の例として、箱式石棺ではあるが西岡台箱式石棺が挙げられる³⁾。この石棺の規模は、長さ187cm・幅35~20cmで、棺内には成人と思われる人骨が残っていた。調査者は、石棺の構造から「古墳時代前半頃」という年代を想定しており、この1号土壌墓の年代とも矛盾しない。

(2). 2号土壌墓

前方部の中央から約4mほど南にずれた位置にある石蓋土壌墓であり、頭位はN15°Wをとる。この土壌は、本古墳を前方後円墳とした場合には前方部墳丘内にあたる位置にある。しかし、盛土がほとんどないところでもあり、土壌の築造が墳丘構築前であるか後であるかは明らかにできなかった。

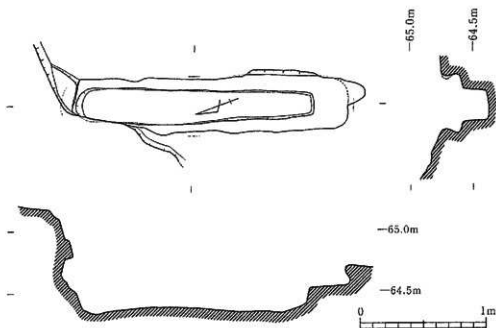
1号と同様に二段掘りの土壌であるが、墓壙の上端で長さ245cm・幅115cmを測り、1号と比較するとかなり大きい。蓋石には安山岩の割石を用いており、土圧で割れている石もあったがもともとは5枚で構成されていたようである。その蓋石5枚を被せる順序は、頭位にある石から順に1~5と番号を付けると1→2→4→3・5となっており、頭の方から先に蓋をしていることがわかる。棺にあたる2段目の土壌は、縁に白色粘土を敷き、蓋石を被せた後、全体をさらに断面亀甲状に、極めて入念に粘土で覆っている。粘土は、最も厚いところで約5cmを測り、蓋石は全て隠れてしまう状態である。棺内は、土圧によって壁が崩壊した部分があり、蓋石の一部が粘土・埋土と共に棺内に落ち込み、半分ほど土砂に埋もれていた。その土砂を除去すると、床面で長さ156cm・幅33cm・深さ33cmを測り、頭位にあたる北側には枕を造り出していた。

また、人骨こそ残っていなかったが全面にかなりの量の赤色顔料が塗られており、頭から胸にかけてと思われる部分が特に多かった。副葬品としてはガラス小玉2点があり、1点は被葬者の右腕と思われる部分から、もう1点は上半身付近の排土からの検出である。

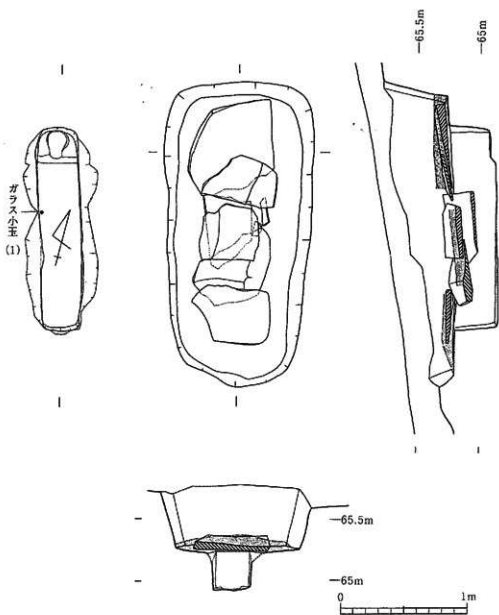
半島基部における石蓋土壙墓の検出例として、西潤野古墳1号棺⁴⁾・楢崎古墳4号棺⁵⁾・南山内石蓋土壙墓⁶⁾・向野田石蓋土壙墓⁷⁾・榕原石蓋土壙墓⁸⁾が知られている。この中では、向野田古墳の前方部端から北北西40mの地点で検出された、向野田石蓋土壙墓に最も似ている。

(3). 3号土壙墓

T-1の東側端、前方部裾より約2m離れた地点に土壙の一部を検出した。調査の最終段階で墳丘土層図作成中に発見したものでその形態・規模等は不明である。しかし、土壙の存在に気付かず地山確認をしようと一部を掘り下げた際、偶然にも赤色顔料を検出しており、その位置(墓壙の上端から約40cm)が土壙の底と思われる。蓋となる石材がみられないところから、1号土壙のような木蓋の土壙である可能性が高い。



第28図 潤野3号墳1号土壙墓実測図(1:30)



第29図 洞野3号墳2号土坑墓実測図 (1:30)

5. 出土遺物

墳頂祭祀に伴う土師器のほかに、鞍部と北側くびれ部からも数点の土師器が出土した。また、2号土墳墓にはガラス小玉2点が副葬されていた。

(1). 土師器

注目されるのは土師器である。九州でも前期古墳からこの様にまとまった状態で出土した例は極めて少なく、古墳の編年を考える上での一級の資料といえる。3節で述べたとおり墳頂部の土器については祭祀に伴って故意に壊した形跡があるが、前方部の土器の割れ方は故意とは言いがたい。しかし、土器の形態からみても両者の時間的な差は考えにくく、いずれも墳丘構築直後と考えて差支えなからう。

[後円部墳頂出土の土師器]

1は唯一完形となる直口壺である。器高15.3cm・口縁部径11.7cm・頸部径6.9cm・胴部最大径11.4cmを測り、底部に径0.6cmの穿孔を施す。口縁部は直線的に大きく開くが、口縁端部から2.5cm程のところでは僅かに外反しながら薄くなる。内面の調整は口縁部でナデ、肩から頸部にかけては指頭圧痕が残る。胴中央部には横方向の刷毛目があり、底部は刷毛目の上からの削りで器壁をかなり薄くしている。その部分には焼成前に内面から穿孔を施しているようである。外面では胴の一部に僅かに刷毛目が残る。色調は赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。

2は小型の壺の頸部である。胴部の形状は1と異なるが、口縁部は1にちかく、直口壺の類であろうか。頸部と胴の肩部に継目があり、頸部だけは内側から粘土貼り付けによって補強している。口縁部は先端に近づくにつれ薄くなるようで、内面にはヘラ削りの痕が残る。

3と4は小型丸底壺であるが、生活遺跡から出土するものよりかなり小型で、祭祀用に作られたものであろう。3は器高6.5cm・口縁部径8.4cm・口縁部高3.7cm・頸部外径5.4cm・胴部最大径6.0cm・胴部高2.8cmを測る。口縁部は大きく開くが、頸部から三分の一のところやや反りが弱まる。器壁は2～3mmとかなり薄い。4は口縁部径7.6cm・口縁部高2.8cm・頸部外径5.5cm・胴部最大径6.0cmを測り、口縁部の長さを除けば3とほとんど同じプロポジションであるが、器壁は2.5～4.5mmと3に比べやや厚い。色調は3が淡赤褐色、4が赤褐色を呈し、胎土はいずれも緻密である。

5は器台の脚部である。脚部と受部の接合部は中空とはならず、脚内面最上部には棒状工具の痕跡がある。外面の調整は不明であるが、内面は刷毛の上に指頭圧痕が残る。胎土は緻密であるが、焼成が良くないためか乳白色を呈する。

6・7・8は高杯の脚部である。いずれも柱状の長い脚に薄い皿を伏せたような裾部を接合しているため、その接合点で大きく屈曲し、内外面ともに明瞭な稜をつくる。6は脚部高10.0cm・裾部径11.0cmを測り、脚柱部3ヵ所に径9mmの穿孔を施している。脚柱と裾を接合した後、

脚柱内面は横方向のヘラ削り、裾部内面には刷毛目が残る。最後に外面から3ヵ所に穿孔を施しているが、その高さ・位置ともに規則的であるとは言いがたい。色調は外面赤褐色・内面淡灰褐色を呈する。7は一部しか残存していないが、調整・色調・穿孔などの点で6と似ている。8も穿孔を除いてスタイル的には6に近い。内面は横方向の削りであるが、最上部の状況からすると先端の鋭利なナイフ状の工具を使っていることがわかる。また、その部分の中央に小さな窪みが残っており、坏部を接合する際の棒状工具の痕跡であろうか。色調は内外面ともに赤褐色を呈す。

9・10・11は小型の高坏の脚部である。前記した3つの高坏が実用的でもあるのに対し、これらはミニチュア的で祭祀用に作ったものと考えられる。調整が判りにくいのは、それが前記の高坏ほど丁寧でないためであろうか。10の内面最上部には貫通しない窪みがあるが、8と共通した理由からであろう。いずれも胎土は緻密で、色調は明赤褐色である。

12は高坏の裾部であり、復元すると径12.4cmになる。大きさからすると、6～8のような中型の高坏の裾部であろう。6の裾部と比較すると、端部が細くならない点で若干異なる。内外面ともに斜方向の刷毛目が残りに、色調は赤褐色である。

13は高坏の坏部である。12と同様に中型の高坏の一部であろう。坏底部はかなり低い位置にあり、そこで屈折し口縁部は大きく開く。外面のみに明瞭な稜をつくる。内外面ともに丁寧な刷毛目が残りに、赤褐色を呈する。

14・15・16は器形が明らかでない土器である。14と15は同一個体になるものと思われ、14の上部には接合の痕が残る。内外面ともにナデによる調整。器台の脚部であるとも思えるが、裾が特徴的で類例は見当らなかった。16は調整の状況からすると、何かの脚か台になるものであろう。内面はハケ目、外面上部には接合の痕が僅かに残る。色調はいずれも淡赤褐色を呈する。

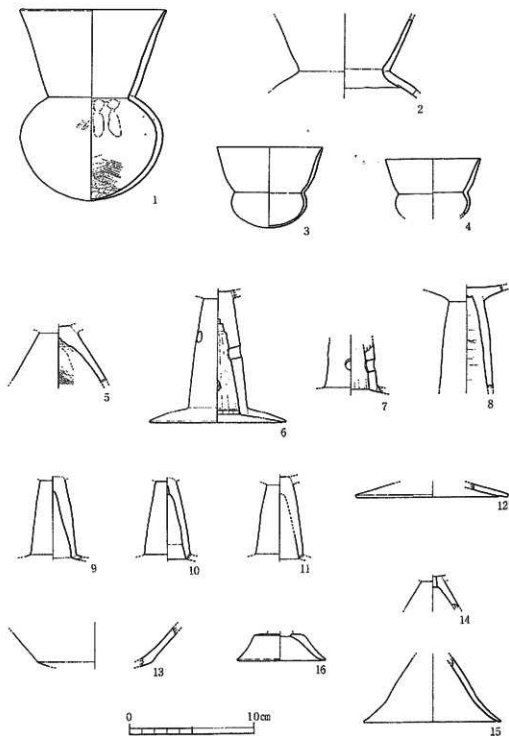
[前方部出土の土師器]

17・18は6～8に近い中型の高坏である。17は口縁部と裾端部を除き復元が可能である。坏底部は13より広く、屈折部の角度は若干弱い。脚柱部の調整は、外面が細かい横方向の磨き、内面はヘラによる横方向の削りである。色調は明赤褐色で、脚柱内部のみ茶褐色を呈する。

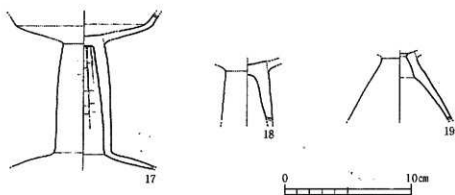
19は5と違い接合部が中空となる器台の脚部である。風化が激しく内外面の調整は不明。色調は明赤褐色を呈する。

(2). 玉類

2号土壙墓よりガラス小玉2点が出土した。1は被葬者の右腕と思われる地点から検出したもので、径3.5mm・厚さ3mm・孔の内径1mmを測り、色調はブルー。2は上半身付近の排土から検出したもので、径4mm・厚さ2mm・孔の内径1mmを測り、色調はスカイブルーを呈する。



第30图 澗野3号墳頂部出土土師器実測図(1:3)



第31図 洞野3号墳前方部出土土師器実測図(1:3)



0 10mm

第32図 洞野3号墳2号土塚墓

出土ガラス小玉実測図(1:1)

6. 小結

〔墳形について〕

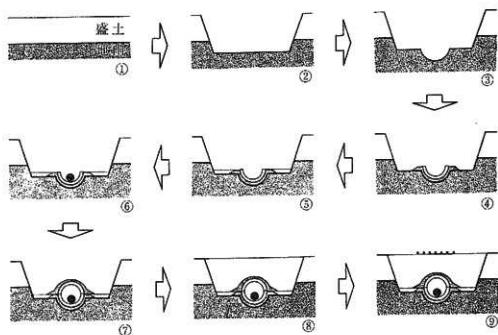
洞野2号墳にも共通することであるが、東側の高まりをどう考えるかで、その意味は大きく異なろう。調査では、前方部の可能性を考えて数本のトレンチを設定したが、明確な墳丘ラインは検出できなかった。しかし、墳丘は地山削り出しでもあり、それだけで前方後円墳を否定し円墳とするには疑問が残る。仮に円墳と考えた場合でも、東側の高まりは意味のないものではなく、何かを意識してあえて削り残したと考えるのが妥当であろう。

洞野2号・3号墳のような墳丘形態の古墳としては、北北東約800mの位置にある楯崎古墳を挙げることができる⁹⁾。地山削り出しの全長46mの前方後円墳もしくは径22mの円墳と考えられ、5世紀中葉の所産で立岡古墳群に続く同系列の族長墓の可能性が極めて高い古墳である。詳細は省略するが、前方部の形態については報告書でも疑問視しているとおり、極めて不明確で定型の前方後円墳とは明らかに違っている。今のところ周辺ではこの他に類例を知らないが、このような墳丘形態は宇土市東部の古墳群の伝統的なものなのかもしれない。ただし、半島基部に限定せず、広範囲にわたって類例を探すことも必要であろう。これまでは単に前方後円墳または円墳として扱われてきた古墳のなかに、洞野2号墳・洞野3号墳・楯崎古墳などのような形態の一群に分類できるものがないとはいえず、調査済みの古墳も含めて再検討することが今後の課題である。本報告では、2号墳・3号墳ともに「東側の高まりは前方部を意識して削り残したもの」と考え、前方後円墳の可能性が高い古墳ということで一応の結論としておきたい。

[主体部の形態について]

洞野3号墳主体部については、今回の調査結果から以下のような構築順序が推定される。また、これを模式化したのが第33図である。この内容については、粘土槨を完掘していないため一部不明確な点もあり、けて十分なものとは考えていない。しかし、将来的に粘土槨内部を調査しなければならなくなった場合の資料として、批判を恐れずに敢えて提示したものである。

- ① 墳丘を一旦完成させる。
- ② 墓壙を断面逆台形状に地山まで掘り込む。
- ③ 掘り込んだ墓壙の中央部を、棺床としてさらに断面半円状に掘り込む。
- ④ 木棺の棺身を粘土で固定する。
- ⑤ 埋葬儀礼の場をつくるため棺外面を整える。
- ⑥ 儀礼及び埋葬を行なう。
- ⑦ 棺蓋を被せた後、全体を粘土で覆う。
- ⑧ 墓壙全体を埋める。
- ⑨ 墳頂において祭祀を行なう。



第33図 洞野3号墳主体部構築模式図

このなかで、①から②にかけての墓塚構築法は、和田晴吾氏の分類¹⁰⁾によると「掘込墓塚 a 類」に属するものである。この掘込墓塚 a 類について、氏は若干の疑問を残しながらも「掘込墓塚 a 類とその他の類型を比べた場合、前者は畿内の・古墳的なものであるのに対して、後者の特に掘込墓塚 c 類(地山に墓塚を掘り込みその後盛土を行って墳丘を完成させる)や無墓塚は在地的伝統的なもの……」としている。また、③④⑥⑦のような木棺の埋置形態は、吉留秀敏氏の分類¹¹⁾によれば「B1 形式」に属するものであり、代表例としては京ノ隈古墳と東郷高塚古墳が挙げられている。ちなみに吉留氏は、現時点では前Ⅱ期(前4期・後3期による区分)の例を最古としている。

割竹形木棺については、長さ400cm \times α ・幅70~80cmとかなり大型である。このような大型木棺の出土例は県内では極めて少なく、特に粘土椀に伴うものとなると初例である。宇土半高基部においては、堅穴式石椀に内蔵したものはあるが弁天山古墳¹²⁾・迫ノ上古墳¹³⁾・チャン山古墳¹⁴⁾の3例が知られている。その木棺の形態については不明な点が多いが、本古墳とは距離的・時期的にも近く参考となろう。

[土器について]

図示したもののうち前方部出土の3点を除けば、全て墳頂祭祀に伴うものである。古墳時代前期の墳頂祭祀遺構が、このようにほぼ完全な形で検出されることは全国的に見てもかなり少ない。これは、単に墳頂祭祀を行った例が少ないというばかりでなく、盗掘等によって祭祀遺構そのものが壊されている場合が多いためであろう。近くでは大牟田市の倉永茶臼塚3号墳¹⁵⁾が挙げられる程度で、極めて貴重な発見といえる。土器の内容については、大型の土器こそ含まないが高坏・小型丸底壺・器台の三種が揃っており、古墳出土の土器としては一級の資料といえる。また本古墳は未盗掘であり、棺内には埋葬当時に近い状態で副葬品が残されていると考えられ、将来的には遺物と土器の対比も可能となろう。その時には、この土器の価値がさらに倍加されることは言うまでもない。また、これらの土器の特徴の一つとして、色調が赤みを帯び、胎土が精製されている点が挙げられる。古墳から祭祀用として出土したものであり、その性格は特殊であるともいえるが、周辺の遺跡出土の土器と比較すると明らかな差異がある。土器を実見した研究者からも指摘があったが、赤い色をかなり意識して胎土を選んだ可能性が高い。その場合、胎土は近在のものではなく、どこかからの搬入品であったとも考えられ、胎土分析を今後の課題としておきたい。

本古墳出土の土器との比較資料として、同じ宇土半高基部にある中世宇土城跡(西岡台)V字溝出土の土器¹⁶⁾がある。この西岡台の土器と本古墳の土器で直接比較できるのは、高坏・小型丸底壺・器台の3種である。高坏は、器形としてはかなり近いものもあるが、潤野3号墳の方が坏部及び脚部の屈折部の稜線がシャープで、調整も丁寧である。小型丸底壺も近いスタイルのものを含んでいるが、潤野3号墳の方が調整が丁寧で、器壁も比べものにならない程に薄い。

器台は脚部ばかりであるが、スタイル的に西岡台の方が若干退化した形態である。西岡台の土器については、調整が若干雑になる傾向があり、器形的にも布留新段階にいれても差支えないようなものも僅かに含んでいる。潤野3号墳は、西岡台と比較して大差ない段階と言えるが、細かい部分を見ると西岡台に先行もしくは並行することはあっても遅れることはないと考えられる。

県内出土の土師器について、この時期の土師器の編年を行なったものに野田拓治氏の論文¹⁷⁾がある。野田氏の編年によれば、西岡台は沈目Ⅰ期とほぼ並行の段階として捉えられているので、潤野3号墳は沈目Ⅰ期と並行するか僅かに先行する段階と考えられる。しかし、県内におけるこの段階の土器は、在地的ともいえるものが多いために、細かい部分での十分な比較ができないのが実情である。これに対し、北部九州においては、近年の大規模な発掘調査によって、量的にも内容的にも良好な資料が揃っており、これまでに、武末純一氏¹⁸⁾・田崎博之氏¹⁹⁾・柳沢一男氏²⁰⁾・柳田康雄氏²¹⁾らが編年案を提示している。このなかで、最新の編年である柳田氏の編年案に従うと、潤野3号墳は土師器Ⅱ-b(布留中相)の段階、西岡台は土師器Ⅱ-bを中心として一部土師器Ⅱ-c(布留新相)まで下る可能性のある段階と考えられる。また、畿内においては布留式土器でも中相段階の細分化が進んでいる。畿内と九州の土器を直接対比できるかどうかには疑問がないわけではないが、畿内出土の土器を中心に中相段階(布留Ⅱ)をabcの3小期に細分した柳本照男氏の編年案²²⁾に従うと、潤野3号墳は布留Ⅱbに近い布留Ⅱcの段階、西岡台は布留Ⅲaまで下る可能性のある布留Ⅱcの段階と考えることができる。これらのことから本報告では、潤野3号墳の土師器を布留中段階でも比較的新しい段階、西岡台は若干の年代幅を想定する必要があるかもしれないが、おおそ潤野3号墳に並行するか僅かに下る段階と捉えておきたい²³⁾。

〔築造時期とその背景について〕

粘土椀内部こそ未掘ではあるが、土器からの推定は可能である。前述したようにその土器は「布留式中段階のうち比較的新しい段階のもの」と考えられるので、土師器の年代観という問題はありますが、おおそ4世紀第3四半世紀頃の所産と推定しておきたい。

また、同じ宇土半島基部にある弁天山古墳・追ノ上古墳・向野田古墳²⁴⁾などの前方後円墳との前後関係であるが、弁天山と追ノ上は壜穴式石椁に大型の木棺を内蔵するという主体部構造から、向野田と潤野3号より先行するものとみられる。向野田と潤野3号については、前者が壜穴式石椁に舟形石棺、後者が粘土椀に割竹形木棺を納めるという相反する大きな違いがあり、主体部以外でも、向野田が副葬品と埴輪、潤野3号が土師器の良好な資料をもつが共通する資料はない。現段階では、土器編年による年代観と玉・鏡を中心とした副葬品編年による年代観は、必ずしも一致していないために、両者の前後関係については保留せざるを得ない。

潤野3号墳成立の背景については、在地的でない粘土椀に大型の割竹形木棺を納める点を考

えると、墳丘形態に若干の違いこそあれ、弁天山・追ノ上・向野田古墳などと同様に、畿内の影響を強く受けて成立した古墳の一つであることは間違いないと言えよう。

(元松)

注

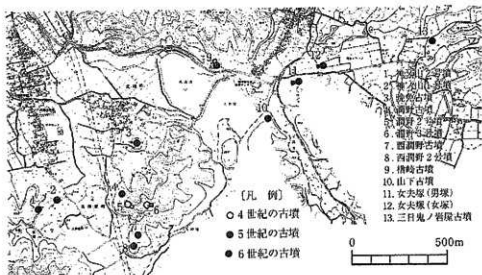
- 1) 服部徳志「大塚古墳の埋葬施設について」『摂津豊中大塚古墳』1987年
- 2) 柳本照男「土師器・須恵器」『古墳時代の研究』第8巻古墳Ⅱ副葬品、雄山閣、1991年
- 3) 平山修一・高木恭二「西岡台箱式石棺」『宇土半島基部古墳群』1987年
- 4) 本書第Ⅱ章参照。
- 5) 高木恭二・木下洋介他「ヤンボシ塚古墳・楯崎古墳」『宇土市縄文文化財調査報告書』第13集、1986年
- 6) 木下洋介「南山内石蓋土塋墓」『宇土半島基部古墳群』1987年
- 7) 富樫卯三郎「向野田古墳」『宇土市縄文文化財調査報告書』第2集、1978年
- 8) 三島格「宇土市轟椿原における石蓋土塋の一例」『熊本史学』第15・16号、1959年
- 9) 註5)に同じ。
- 10) 和田晴吾「葛制の変遷」『古代史復元』第6巻古墳時代の王と民衆、講談社、1989年
- 11) 吉留秀敏「九州の割竹形木棺」『古文化談叢』第20集発刊記念論集(中)、1989年
- 12) 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報」『熊本史学』第30号、1966年
- 13) 富樫卯三郎「追ノ上古墳」『宇土市の文化財』第3集、1977年
- 14) 富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」『石人』第3巻第7号、1968年
- 15) 平島勇夫他「倉永茶臼塚」『大牟田市文化財調査報告』第15集、1981年
- 16) 平山修一・高木恭二「宇土城跡(西岡台)」『宇土市縄文文化財調査報告書』第1集、1977年
- 17) 野田拓治「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年
- 18) 武末純一「福岡県早良平野の古式土師器」『古文化談叢』第5集、1978年
- 19) 田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第120輯、九州大学文学部、1983年
- 20) 柳沢一男「土器出土古墳編年試案の概要—九州—」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第1分冊(第25回縄文文化財研究会)、1989年
- 21) 柳田康雄「土師器の編年(2九州)」『古墳時代の研究』第6巻土師器と須恵器、雄山閣、1991年
- 22) 註2)に同じ。
- 23) 柳田編年案と柳本編年案の対比について、柳田氏の土師器Ⅱ-bを柳本氏の布留Ⅱa・Ⅱb・Ⅱcの3小期とほぼ並行する段階、柳田氏の土師器Ⅱ-cを柳本氏の布留Ⅲaにはほぼ並行する段階と考えた。
- 24) 註7)に同じ。

Ⅶ. 総括 —立岡古墳群の位置付けにかえて—

平成2・3年度における確認調査によって、それぞれの古墳の実態が明らかになっただけでなく、立岡古墳群全体として、ひいては花園の古墳群までも含めた古墳群全体としての流れがある程度は把握できるようになった。このことは、それらを包括する宇土半島基部古墳群としての全体的な在り方の問題にまで発展することになり、その意義は極めて大きい。報告を終えるにあたって、宇土半島基部の古墳群の中で花園・立岡古墳群がどのように位置付けられるかを考え総括にかえたい。

各古墳の概要はこれまで述べてきた通りであり、簡単にまとめれば第3表ようになる。立岡古墳群は、2基が盗掘をうけていなかったことで埋葬当時の状態を保っていたという点に特色があり、潤野2号墳もその可能性がある。この盗掘されていないという事実によって得られた知見は数多いし、今後の調査によって、なおその比重は重くなってこよう。しかも、これまで宇土半島基部古墳群の中では、詳細が判らなかった関係からそれほど重視されていなかった立岡古墳群が、今回の調査によって永続的に営まれていたことが明らかになり、それが花園古墳群の方に継続し、宇土半島基部の中で一つのグループとして重要な位置を占めていたということが明確に捉えられるようになった。

潤野2号墳の内容が不明であるため明確なことは言えないし、前方後円墳である可能性も高いが、4世紀の第3四半期頃に確実に立岡丘陵では潤野3号墳が築かれている。墳丘は、前方後円墳としての体裁を整えているようであるが、今一つ決定的な要素を欠いている。主体部としては割竹形木棺を内蔵する粘土槨が構築されていたし、墳頂には埋葬儀礼最後の段階に実施



第34図 立岡・花園地図古墳変遷図(1:20,000)

された祭祀に伴う前期古墳特有の土師器3点セットが出土しており、当該地域のみならず、九州の古墳の編年を考え、年代を決定する際の重要な資料を提供することになった。残念ながら、木棺の腐朽によって粘土槨の粘土が陥没して土師器群は飛び散ったような状態になってしまい、墳頂部における当初の土師器の配列がどのようなものであったかは判っていないが、これらが布留式中段階の中でも新しい段階に属するものであることは明らかである。立地その他からみて、洞野2号墳はこの3号墳の前後の時期であり、早ければ4世紀中頃、遅くとも4世紀後半から末頃には位置付けできるわけであり、3号墳の後背地に存在した可能性のあるもう1基の古墳が、これまた2・3号墳の前か後にくるものであるかもしれない。そうなれば、この場所で5世紀初頭もしくは前半頃までは永続的に営まれていたことが十分考えられるし、更にはそれに続いて西洞野2号墳や西洞野古墳が5世紀前半から中頃にかけて築造されたということになる。それに次ぐ晩免古墳¹⁾が5世紀後半、同じく洞野古墳²⁾も5世紀後半ではであろうが晩免に次ぐものと思われるし、やや時をおいて立岡丘陵の最東端には6世紀前半から中頃にかけて山下古墳³⁾が築かれ、そこから後は花園方面に続く。なお、立岡丘陵の西に位置する松山丘陵の東端には神ノ山古墳があり、その1号墳⁴⁾からは、組合せ式家形石棺が発見されている。副葬品や石棺の形状などからこの1号墳は5世紀後半に属するものと考えられ、時期的には立岡古墳群の晩免古墳や洞野古墳に近い頃であろう。この神ノ山の古墳と立岡の古墳とはかなり密接な関係にあった可能性がある。

雁回山南麓の花園地区には、立岡古墳群が築造を続けている5世紀後半の中頃に近い段階で榎崎古墳⁵⁾が造られているし、なおかつこの古墳では5世紀末頃まで永続して棺が安置され続けているところに特色がある。そして、山下古墳に後続する形で女塚の男塚古墳・女塚古墳⁶⁾の前方後円墳が6世紀中頃から後半にかけて築かれ、この地域では女塚古墳を最後として前方後円墳はつくられなくなる⁷⁾。前方後円墳消滅後は、女塚古墳の東方にある鬼ノ岩屋古墳へと続くが、この鬼ノ岩屋古墳は発掘調査が実施されておらず詳しいことはよく判らない。露出している石室からみると6世紀の終りから7世紀にまで入った段階の円墳である可能性がある。

鬼ノ岩屋古墳以後は古墳そのものの造営はなかったようで、この古墳から南へ約1.2km離れた下益城郡松橋町古保山には奈良時代後期頃の所産とみられ宇土郡寺にも想定されている古保山麿寺⁸⁾が存在する。ここで想定の当否を述べる余裕はないが、少なくとも古墳時代に続く段階に文様瓦を出土するような遺跡が、宇土半島基部の東群をなすこのグループの奥津城の一隅に存在するという事実は忘れることができない。

以上述べて来た編年案は第4表⁹⁾のごとくまとめることができ、富樫卯三郎氏が想定された宇土半島基部古墳群の東の一群(第Ⅲグループ)の実態¹⁰⁾は、今回の調査によってより詳しく裏付け出来たものと思われる。

表3 立岡・花園地区周辺古墳概要

古墳名	墳丘	内部主体	主体部計測値(単位:cm)	出土遺物他	備考
西野古墳	なし(集団墓?)	1号棺:赤形石蓋土葬墓 2号棺:小型箱形石棺 3号棺:箱形石棺	1号棺内法:長186,幅60,深33 2号棺内法:長90,幅41,深43 3号棺内法:長177,幅53,深53		1・2号棺を昭和35年に 高橋卯三郎氏調査
西野野2号墳	円墳25m	箱形石棺 (墓室計測値:長377,幅320, 深115cm)	内法:長167,幅50,深50	熟年男性1体・仿 製素文鏡1面・鉄 弁1点・滑石製臼 玉777点・整骨4点	原料について、人骨頸部 は朱、他はベンガラ
轟野古墳	円墳13m?	家形石棺(組合式)		今回、棺蓋の一部採獲	明治16年発見
轟野2号墳	前方後円墳29m? (円墳19m?)				
轟野3号墳	前方後円墳39m? (円墳28m?)	粘土椀・割竹形木棺 (墓室計測値:長620,幅420, 深120cm)	主体部外法:長400+α,幅70+α 1号土葬内法:長185,幅28-18,深20 2号土葬内法:長156,幅33,深33 3号土葬は未掘	主体部直上より墳 頂縁部に伴う土師 器。2号土葬より ガラス小玉2点。	墳丘外に3基の土師墓 (前方後円墳である場 合、2号土葬は前方部 墳丘内)
晚免古墳 (花園陵墓参考地)	円墳20m?	家形石棺(組合式)		「刀剣に挟むしき もの数個」	明治19年発見
相崎古墳	前方後円墳46m? (円墳22m?)	1号棺:家形石棺(組合式) 2号棺:舟形石棺(列柱式) 3号棺:家形石棺(組合式) 4号棺:石蓋土葬 前方部5号棺:箱形石棺	1号棺内法:長188,幅70,深85 2号棺内法:長172,幅60,深47 3号棺内法:長159,幅76,深75 4号棺内法:長149,幅32,深50 5号棺内法:長173,幅59,深56		大正10年発見
山下古墳	円墳20m?			明函形埴輪片 須恵器	墳丘版築
女夫塚(男塚)	前方後円墳46m	横穴式石室?		須恵器	墳丘版築
女夫塚(女塚)	前方後円墳?			須恵器	墳丘版築
三日丸ノ岩屋古墳	円墳12m以上	横穴式石室	全長540,女室長300, 女室幅200-165		

(元松作成)

第4表 周辺地域古墳編年表

時期区分	前方後円墳	円 墳	そ の 他	周辺地域における主要古墳
1期				
2期				弁天山古墳 追ノ上古墳
3期	潤野3号墳		潤野3号墳 土壌墓群	チャン山古墳 向野田古墳
4期	(潤野2号墳)			
5期				(天神山古墳)
6期		西潤野2号墳		城2号墳
7期	権崎古墳 2号棺		西潤野古墳 1号棺	
8期	3号棺 1号棺	晩免古墳 潤野古墳		
9期				
10期	女夫塚(男塚)古墳	山下古墳		国越古墳 松橋大塚古墳
11期	女夫塚(女塚)古墳			
		三日鬼ノ岩屋古墳		桂原古墳 飯又古墳

*時期区分は和田晴吾氏1987年⁹⁾によった。
(高木・元松作成)

それではこの東群の動きが、宇土半島基部古墳群全体の動きとどのように連動し、それぞれのグループの興隆とどのように関連していたものかを簡単に見ていくことにしたい。

富樫氏によるグループ分けを参考として、いまま少し詳細に見ていけば、第Ⅰグループとしては弁天山古墳、国越古墳などの不知火支群が、第Ⅱグループとしてスリバチ山古墳・迫ノ上古墳に城ノ越古墳、やや離れるが天神山古墳を加えた轟支群、それに第Ⅳグループには向野田古墳や御手水古墳などの松山支群がある。やや広域になりすぎるかもしれないがこの一群には松橋大塚古墳や仁王塚古墳も加えておくことにする。

これらの4グループ全体を宇土半島基部古墳群として総称することになるが、それら各支群の中で前方後円墳や大型円墳の規模や数の変化から首長墓の系譜は、4世紀代においては轟支群・不知火支群・松山支群がほぼ平行している。しかし、何といても轟支群が圧倒的に優勢であり、その状態は5世紀前半ころの全長110mの天神山古墳まで続く。5世紀中頃になるとその実体はやや不明な点があり、今回の立岡・花園の古墳がその様相の一端を示した。それから大きなブランクを経て6世紀代になって不知火支群・松山支群・花園支群のそれぞれにおいてやっと面目を果たすほどの首長墓の復興がはかられ、6世紀中ごろから後半の頃に前方後円墳の築造は終わっている。

今回の調査によって、宇土半島基部古墳群を見直す機会となり、墳丘の規模や形状、それに内部主体や副葬品、供献土器、埴輪の問題など総合的な観点から整理し直す必要性が生じてきた。今後、各古墳の調査成果を整理し、再調査を実施することなどによって、当地における古墳時代社会の実体解明が進み、これらの関係する遺跡群が末長く保存、活用されるようになることを切望する。

(高木)

註

- 1) 小杉豊都「肥後國に埋葬するめづらしき石棺」『帝國古蹟取調會會報』第3号, 1902年
- 2) 「古墳発掘記録」
- 3) 高木恭二・木下洋介・元松茂樹「ヤンボシ塚古墳・櫛崎古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集, 1986年
- 4) 宇土高校社会部「神ノ山1号墳」『宇土高校社会部報』第2号, 1968年
- 5) 註3) 書に同じ。
- 6) 高木恭二・木下洋介「女塚古墳(女塚)」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第11集, 1986年
- 7) 高木恭二「最後の前方後円墳」『古代学研究』第102号, 1984年
- 8) 広瀬正照『肥後古代の寺院と瓦』1984年
- 9) 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第134号, 1987年
- 10) 富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」『宇土城跡(西岡台)』1977年

付 論

熊本県宇土市西潤野2号墳出土の古墳時代人骨

松下孝幸^{*}・分部哲秋^{*}・佐伯和信^{*}

【キーワード】：熊本県、古墳時代人骨、男性、低・広顔

はじめに

熊本県宇土市立岡町字西潤野に所在する西潤野(にしゅうろの)2号墳の発掘調査が1990年に行なわれた。この古墳は円墳で、内部主体である組合式箱式石棺から保存状態の良い人骨が1体出土した。

宇土市から人骨を出土した古墳としては、向野田古墳が有名であり、この前方後円古墳からは鏡などの多くの副葬品を伴った女性骨が発掘されている(HOJO, 1982)。西潤野2号墳はこの向野田古墳の西方約1.5kmのところの位置していることから、人骨の特徴が目目される。

熊本県から出土している古墳時代人骨は多くは益城町の福原(松下・他, 1985)、玉名市の小路(松下, 1985)などの他に、熊本市の古城(松下・他, 1985)、中央町の四十八塚古墳(松下・他, 1989)、鹿本町津袋(松下・他, 1986)などが報告されている。

西潤野2号墳は前期古墳が集中して認められる宇土半島のつけ根に存在し、向野田古墳に近接していることから、人骨の特徴によっては当時の社会的状況を推測することも可能になるなど、その人類学的意義はかなり大きい。

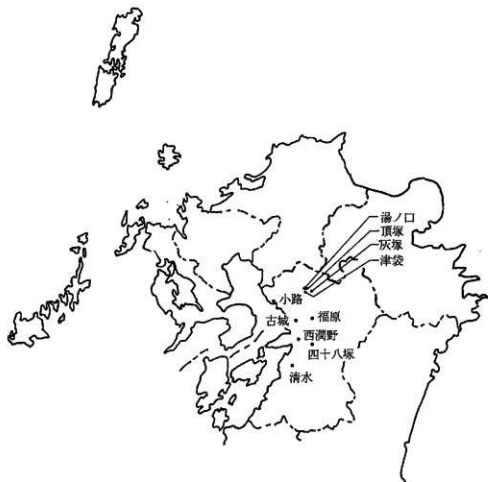
出土人骨の人類学的観察や計測を行なったので、その結果を報告しておきたい。

資料

本古墳の1990年の調査で出土した人骨は1体のみで、その残存部分は第36図に示すとおりである。この人骨は、熟年の男性骨であり、考古学的所見より、古墳時代(5世紀中頃)に属する人骨である。

人骨の出土状態は仰臥伸展であるが、発掘時には大腿骨が両側とも裏返しになっており、不自然な状態であった。しかし、同時に両側の脛骨も内側面が上向きになっていたことから、この被葬者は膝をやや立て、しかも開脚状態で埋葬されていた可能性がある。軟部が腐敗する過程で、下肢骨が外側方向へ倒れたために、大腿骨が裏返しになり、脛骨の内側面が上向きになったものと考えられる。

*Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine
[長崎大学医学部解剖学第二教室]



第35図. 遺跡の位置 (Fig.35 Location of the Nishiurono Tumuli No.2, Uto City, Kumamoto Prefecture)

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、一部はHowells (1973) の方法で計測した。また、鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で、歯は藤田(1949)の方法で小山田常一(長崎大学歯学部口腔第一解剖)が計測し、齶歯の観察も小山田が行なった。

所 見

各人骨の残存部は第36図に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1号人骨(男性、熟年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨を欠損している。外後頭隆起の様態は不明であるが、乳棘突起は大きい。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右とも認められない。三主縫合は、内板はすべて癒合閉鎖しているが、外板はまだ開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が(183)mm、頭蓋最大幅は150mmで、バジオン・プレグマ高は計測できない。頭蓋長幅示数は(81.97)となり、頭型はbrachykran(短頭型)に属している。頭蓋水平周は(525)mm、横弧長は316mmである。

また、左側頭頂骨には直径約2cm大の骨瘤が認められた。

ところで、熊本県の中央町の四十八塚古墳人は短頭に近い中頭型(79.75)、玉名市の小路古墳人は中頭型(77.37)であり、明確に短頭型に属するのは今回が初めてである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓はやや隆起しているが、鼻根部には陥凹はみられない。鼻骨はやや隆起し、鼻根部は扁平ではない。頬骨は外側へ張り出している。また、顔面部には赤色顔料が付着している。

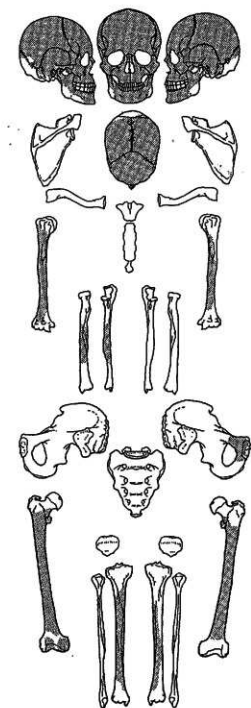
顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が141mm、中顔幅は105mm、顔高は(115)mm、上顔高は68mmで、顔示数は(81.56)(K)、(109.52)(V)、上顔示数は48.23(K)、64.76(V)となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

このような傾向は、熊本県の中央町の四十八塚古墳人、鹿本町の津袋古墳人および小路古墳人と同じ傾向である。

眼窩幅は44mm(右、左)、眼窩高は34mm(右、左)で、眼窩示数は77.27(右、左)となり、両側ともmesokonch(中眼窩)に属している。

鼻幅は26mm、鼻高は51mmで、鼻示数は50.98となり、mesorrhin(中鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が20mm、鼻根横弧長は24mm、鼻根彎曲示数は83.33となり、鼻



西洞野人骨 (男性・熟年) (Nishiurono Skeleton, mature male)

第36図. 人骨の残存部、アミかけ部分

(Fig.36 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

根部は扁平ではない。两眼窩幅は103mmで、眼窩間示数は19.42、鼻骨最小幅は9mmで、前頭突起水平傾斜角は79度を示し、前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は143度、鼻根陥凹示数は16.67である。

側面角は、全側面角が88度、鼻側面角が87度、齒槽側面角は89度で、齒槽性突顎の傾向は認められない。

下顎骨は大きく頑丈である。下顎体の高径は低く、下顎切痕は浅い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と齒槽の状態を齒式で示すと、次のとおりである。

$$\begin{array}{c} \diagup \bullet \bullet \bullet P_1 C I_2 \bullet \bullet \bullet C \bullet P_2 M_1 M_2 M_3 \\ \hline \bullet \bullet \bullet P_2 \bullet C I_2 I_1 \quad I_1 I C \bullet \bullet \bullet \bullet \bullet \end{array} \quad \left(\begin{array}{l} \diagup : \text{不明 (破損)} \\ \bullet : \text{齒槽閉鎖} \end{array} \right)$$

咬耗度はBrocaの1～2度である。なお、上顎の両側中切歯と左側側切歯の部分は齒槽が閉鎖しており、風習的抜歯を思わせるが、本例は上下両顎とも齒槽の状態が健康的ではなく、残存歯の歯根もかなり露出している。従ってこの部分は風習的抜歯とは考えがたい。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

上腕骨および橈骨と尺骨のそれぞれ骨体が残存していた。

① 上腕骨

両側が残存していた。骨体は細いが、三角筋粗面の発達は著しく良好である。

計測値は、中央最大径が22mm(右、左)、中央最小径は16mm(右)、15mm(左)で、骨体断面示数は72.73(右)、68.18(左)となり、骨体は扁平である。骨体最小周は59mm(右)、57mm(左)、中央周は64mm(右)、62mm(左)で、骨体は細い。

(2) 下肢骨

大腿骨と脛骨が残存していた。

① 大腿骨

両側とも骨体が残存していた。粗線は明瞭であるが、骨体両側面の後方への発達は悪く、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が27mm(左)、横径は33mm(左)で、骨体中央断面示数は81.82(左)となり、骨体両側面の後方への発達はきわめて悪い。骨体中央周は(93)mm(左)で、太い。また、上骨体断面示数は58.97(左)となり、骨体上部は著しく扁平である。

② 脛骨

両側とも骨体が残存していた。ヒラメ筋線の様態や骨体の断面形は不明である。計測はほとんど不可能であるが、観察したところでは骨体の大きさはあまり大きくない。

4. 性別・年齢

性別は、眉上弓がやや隆起し、大腿骨の径が大きいことなどから、男性と推定した。年齢は、三主結合の内板がすべて癒合閉鎖していることから、熟年と考えられる。

要 約

熊本県宇土市立岡町字西潤野に所在する西潤野（にしろの）2号墳の発掘調査が1990年に行なわれ、比較的保存状態の良好な人骨が1体出土した。出土人骨の人類学的観察や計測を行ない、次の結果を得た。

1. 今回の調査で出土した人骨は1体で、熟年の男性骨である。
2. この人骨は、古墳時代に属する人骨である。
3. 頭蓋最大長は(183)mm、頭蓋最大幅は150mmで、頭蓋長幅示数は(81.97)となり、頭型は短頭型である。
4. 頬骨弓幅は141mm、中顔幅は105mm、顔高は(115)mm、上顔高は68mmで、顔示数は(81.56)(K)、(109.52)(V)、上顔示数は、48.23(K)、64.76(V)となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。また、眼窩高や鼻高も低い。
5. 鼻根部あまり扁平ではなく、歯槽性突顎の傾向は認められない。
6. 上腕骨は扁平で、三角筋粗面の発達はきわめて良好である。大腿骨は太くて、骨体上部は扁平であるが、骨体の断面形は横広の楕円形である。
7. 外耳道骨腫、風習的抜歯は認められない。また、顔面部には赤色顔料が付着しており、頭蓋には骨瘤が認められた。
8. 以上のように、本例は南九州の山間部の古墳人や四十八塚古墳人、津袋古墳人と同じように顔面には著しい低・広顔傾向が認められ、縄文人の特徴を残し、三角筋がよく発達した古墳人であったと考えられる。

謝 辞

獨筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた宇土市教育委員会生涯学習課の先生方に感謝致します。

参考文献

1. 藤田恒太郎、1949：歯の計測規準について。人類学雑誌、6：27-32。
2. 北條暉幸、1957：熊本県本渡市(天草)妻鼻古墳時代墳墓群出土人骨の予備的研究。札幌医科大学医学進学課程紀要、16：25-32。
3. 北條暉幸、1969：熊本県菊池郡七城村小野崎家型石棺(古墳時代)人骨について。熊本医学会雑誌、43：37-46。
4. 北條暉幸、松田愛人、1969：熊本県菊池郡西合志町「ハヤマ塚石棺」出土の人骨について。熊本医学会雑誌、44：653-658。
5. 北條暉幸、1978：向野田古墳の人骨について。向野田古墳(宇上市埋蔵文化財調査報告書 第2集)：157。
6. 北條暉幸、1979：小田良古墳(熊本県宇土郡三角町小田良)の人骨。三角町文化財調査報告：47。
7. HOJO, T. 1982: A Prehistoric Female Skeleton of the Keyhole-shaped (Square Front Circular Rear) Mound in Mukonoda, Uto City, Kumamoto Prefecture. J. Anthrop. Soc. Nippon, 90: 129-138.
8. 北條暉幸、1983：熊本県玉名郡菊水町江田大久保船型石棺人骨(会)。人類学雑誌、91：235。
9. 北條暉幸、1983：中部九州古墳時代人の顔蓋形態(会)。解剖学雑誌、58：425。
10. Howells, W. W, 1974: Cranial Variation in Man. Peabody Museum Papers, vol.67.
11. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart: 429-597.
12. 松下孝幸、分部哲秋、石田盛、内藤芳篤、永井昌文、1983：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告2)：19-30。
13. 松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985：熊本県益城郡福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群(熊本県文化財調査報告第77集)：29-42。
14. 松下孝幸、1985：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡(玉名市文化財調査報告第6集)：32-48, 57-61。
15. 松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985：熊本市古墳横穴墓群出土の古墳時代人骨。古墳横穴墓群(熊本県文化財調査報告第74集)：129-146。
16. 松下孝幸、中谷昭二、1986：熊本県鹿本町津袋大塚東側1号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側1号石棺出土人骨研究報告書(鹿本町文化財調査研究報告第2集)：5-33。
17. 松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1986：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群 菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)(山鹿市立博物館調査報告書第5集)：111-122。
18. 松下孝幸、分部哲秋、佐伯和信、弦本敏行、1988：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群(II) 菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(3)(山鹿市立博物館調査報告書第8集)：53-63。
19. 松下孝幸、分部哲秋、佐伯和信、1989：熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨。北上原古墳・瀬戸口横穴墓群(熊本県文化財調査報告第104集)：97-107。
20. 松下孝幸、分部哲秋、佐伯和信、弦本敏行、小山田常一、1989：熊本県下益城郡中央町四十八家5号墳出土の古墳時代人骨。堅志田城跡・四十八塚古墳(熊本県下益城郡中央町文化財調査報告第1集)：77-114。
21. 永井昌文、1982：城2号墳人骨について。宇土市史研究、第3号：11-14。
22. 内藤芳篤、分部哲秋、1980：清水1号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓(熊本県文化財調査報告第41集)：22-28。
23. 内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨。熊本県文化財調査報告、第16集：317-322。
24. 鈴木 尚、1963：日本人の骨。岩波書店、東京。

第5表 頭蓋計測値(mm) (Calvaria)

	西沢野 2 男性
1. 頭蓋最大長	(183)
8. 頭蓋最大幅	150
17. バジオン・プレグマ高	—
8/1 頭蓋長幅示数	(81.97)
17/1 頭蓋長高示数	—
17/8 頭蓋幅高示数	—
頭蓋モズルス	—
5. 頭蓋底長	—
9. 最小前頭幅	95
10. 最大前頭幅	114
11. 両耳幅	138
12. 最大後頭幅	—
13. 乳突幅	—
7. 大後頭孔長	—
16. 大後頭孔幅	—
16/7 大後頭示数	—
23. 頭蓋水平周	(525)
24. 横弧長	316
25. 正中矢状弧長	—
26. 正中矢状前頭弧長	122
27. 正中矢状頭頂弧長	244
28. 正中矢状後頭弧長	—
29. 正中矢状前頭弦長	109
30. 正中矢状頭頂弦長	111
31. 正中矢状後頭弦長	—
29/26 矢状前頭示数	89.34
30/27 矢状頭頂示数	45.49
31/28 矢状後頭示数	—
Vertex Rad.	125
Nasion Rad.	98
Subsp. Rad.	99
Prosth. Rad.	103

第6表 顔面頭蓋計測値(mm,度) (Facial skeleton)

	西沢野 2 男性
40. 顔長	—
41. 額顔長	77
42. 下顔長	—
43. 上顔幅	110
45. 頬骨弓幅	141
46. 中顔幅	105
47. 顔高	(115)
48. 上顔高	68
47/45 顔示数 (K)	(81.56)
48/45 上顔示数 (K)	48.23
47/46 顔示数 (V)	(109.52)
48/46 上顔示数 (V)	64.76
顔面モズルス	—
50. 前眼窩間幅	20
44. 両眼窩幅	103
50/44 眼窩間示数	19.42
51. 眼窩幅 (右)	44
(左)	44
52. 眼窩高 (右)	34
(左)	34
52/51 眼窩示数 (右)	77.27
(左)	77.27
54. 鼻幅	26
55. 鼻高	51
54/55 鼻示数	50.98
55(1). 梨状口高	33
56. 鼻骨長	19
57. 鼻骨最小幅	9
57(1). 鼻骨最大幅	19
60. 上顎歯槽長	57
61. 上顎歯槽幅	72
62. 口蓋長	50
63. 口蓋幅	44
64. 口蓋高	—
61/60 上顎歯槽示数	126.32
63/62 口蓋示数	88.00
64/63 口蓋高示数	—
72. 全側面角	88
73. 鼻側面角	87
74. 歯槽側面角	89

第7表 鼻根部計測値 (mm,度) (Nasal root)

	西洞野	
	2	男性
50. 前眼窩間幅	20	
鼻根横弧長	24	
鼻根彎曲示數	83.33	
57. 鼻骨最小幅	9	
44. 两眼窩幅	103	
50/44 眼窩間示數	19.42	
a. 前額突起上幅 (右)	11	
(左)	12	
b. 前額突起水平傾斜角	79	
c. G-N 投影距離	3	
d. 鼻根角	143	
e. G-R 距離	30	
f. 垂線高	5	
f/e. 鼻根陷凹示數	16.67	

第9表 上腕骨計測値 (mm) (Humerus)

	西洞野	
	2	男性
5. 中央最大徑 (右)	22	
(左)	22	
6. 中央最小徑 (右)	16	
(左)	15	
7. 骨體最小周 (右)	59	
(左)	57	
7(a). 中央周 (右)	64	
(左)	62	
6/5 骨體断面示數 (右)	72.73	
(左)	68.18	

第8表 下顎骨計測値 (mm,度) (Mandible)

	西洞野	
	2	男性
65. 下顎關節突起幅	-	
65(1). 下顎筋突起幅	108	
66. 下顎角幅	-	
67. 前下顎幅	53	
68. 下顎長	-	
68(1). 下顎長	-	
69. オトガイ高	35	
69(1). 下顎體高 (右)	34	
(左)	-	
70(2). 最小枝高 (右)	-	
(左)	45	
70(3). 下顎切痕高 (右)	13	
(左)	-	
71(1). 下顎切痕幅 (右)	39	
(左)	-	
70(3)/71(1) 下顎切痕示數 (右)	33.33	
(左)	-	

第10表 橈骨計測値 (mm) (Radius)

	西洞野	
	2	男性
4. 骨體橫徑 (右)	17	
(左)	-	
4 a. 骨體中央橫徑 (右)	17	
(左)	-	
5. 骨體矢狀徑 (右)	11	
(左)	-	
5 a. 骨體中央矢狀徑 (右)	11	
(左)	-	
5(5). 骨體中央周 (右)	44	
(左)	-	
5/4 骨體断面示數 (右)	64.71	
(左)	-	
5a/4a 中央断面示數 (右)	64.71	
(左)	-	

第11表 尺骨計測値 (mm) (Ulna)

		西洞野 2 男 性
11.	尺骨矢状径 (右)	12
	(左)	-
12.	尺骨横径 (右)	18
	(左)	-
S	中央最小径 (右)	11
	(左)	-
L	中央最大径 (右)	18
	(左)	-
C	中央周 (右)	48
	(左)	-
11/12	骨体断面数 (右)	66.67
	(左)	-
S/L	中央断面示数 (右)	61.11
	(左)	-

第12表 大腿骨計測値 (mm) (Femur)

		西洞野 2 男 性
6.	骨体中央矢状径 (右)	-
	(左)	27
7.	骨体中央横径 (右)	33
	(左)	(93)
8.	骨体中央周 (右)	-
	(左)	39
9.	骨体上横径 (右)	23
	(左)	39
10.	骨体上矢状径 (右)	-
	(左)	23
6/7	骨体中央断面示数 (右)	-
	(左)	81.82
10/9	上骨体断面示数 (右)	-
	(左)	58.97

第13表 胫骨計測値 (mm) (Tibia)

		西洞野 2 男 性
8.	中央最大径 (右)	27
	(左)	-

第14表 形態小変異 (Non-metric crania variants)

		西洞野 2 男 性
		右 左
1.	Medial palatine canal	- -
2.	Pterygospinous foramen	- -
3.	Hypoglossal canal bridging	/ /
4.	Clinoid bridging	/ /
5.	Condylar canal absent	/ /
6.	Foramen of Huschke (>1mm)	- -
7.	Jugular foramen bridging	/ /
8.	Precondylar tubercle	/ /
9.	Supra-orbital foramen	- -
10.	Accessory infraorbital foramen	- -
11.	Zygo-facial foramen absent	+ -
12.	Aural exostosis	- -
13.	Metopism	-
14.	Os incae	-
15.	Ossicle at the lambda	-
16.	Parietal notch bone	/ -
17.	Transverse zygomatic suture (>5mm)	- -
18.	Asterionic ossicle	/ /
19.	Occipitomastoid ossicle	/ /
20.	Epipteric ossicle	+ -
21.	Frontotemporal articulation	- -
22.	Biasterionic suture (>10mm)	/ /
23.	Mylohyoid bridging	/ -
24.	Accessory mental foramen	- -
25.	Mandibular torus	- -

[present : +, absent : -, unobservale : /]

第15表 歯の計測値 (mm)

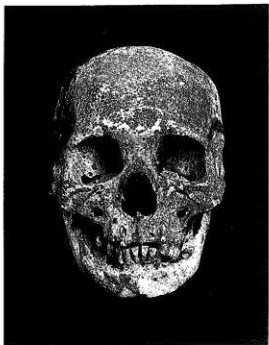
		西洞野 2		
		男 性		
		右	左	
上顎	I ₁	-	-	
	I ₂	△	-	
	C	△	8.26	
	P ₁	-	-	
	P ₂	-	9.15	
	M ₁	-	△	
	M ₂	11.94	11.89	
頬 (唇)	M ₃	-	11.03	
	舌 下顎	I ₁	6.28	6.30
		I ₂	6.79	7.00
		C	7.82	7.89
		P ₁	-	-
		P ₂	8.41	-
		M ₁	-	-
M ₂		-	-	
近 遠	M ₃	-	-	
	心 下顎	I ₁	-	-
		I ₂	△	-
		C	△	8.76
		P ₁	-	-
		P ₂	-	7.12
		M ₁	-	△
M ₂		10.37	△	
心 下顎	M ₃	-	9.45	
	I ₁	5.94	5.95	
	I ₂	6.31	6.50	
	C	7.28	7.70	
	P ₁	-	-	
	P ₂	7.52	-	
	M ₁	-	-	
M ₂	-	-		
M ₃	-	-		

△：計測不可能

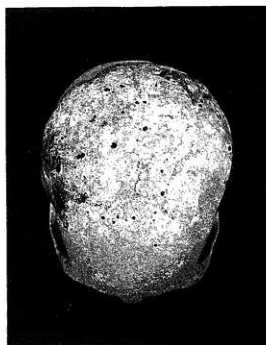
第16表 齲蝕とその程度(Caries of the teeth)

		西洞野 2	
		男 性	
		右	左
上顎	I ₁	/	/
	I ₂	4	/
	C	4	○
	P ₁	/	/
	P ₂	/	○
	M ₁	/	3
	M ₂	2	3
下顎	M ₃	/	2
	I ₁	○	○
	I ₂	○	○
	C	○	○
	P ₁	/	/
	P ₂	○	/
	M ₁	/	/
M ₂	/	/	
M ₃	/	/	

[1~4: present, ○: absent, /: unobservable]



頭蓋前面 (Frontal view of the skull)

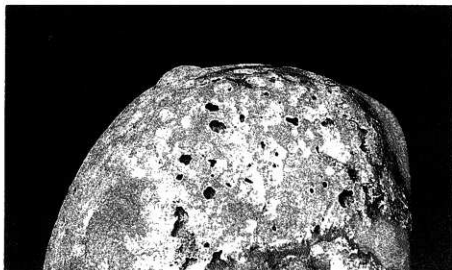


頭蓋上面 (Superior view of the skull)

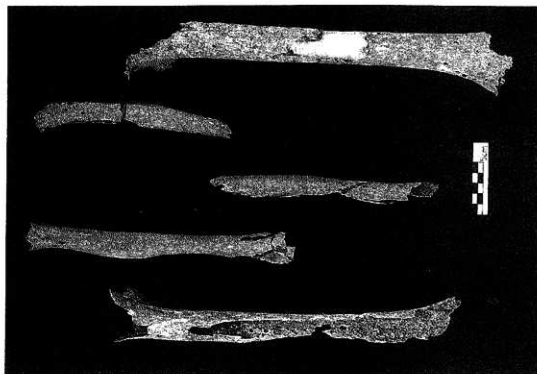


頭蓋側面 (Lateral view of the skull)

西潤野2号墳人骨 (男性・熟年)
(Nishiurono Kofun Skeleton, mature male)



骨腫 (Osteoma)



四肢骨 (Limb bones)

西洞野2号墳人骨 (男性・熟年)
(Nishiurono Kofun Skeleton, mature male)

A Human Skeletal Remain Excavated from the Nishiurono Tumuli, Uto City, Kumamoto Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
[Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine]

Keywords : Kumamoto Pref., Kofun skeleton, Male, Low and wide face

A Human skeletal remain dating the Kofun Period were excavated from the Nishiurono tumuli, Uto City, Kumamoto Prefecture, in 1990.

An anthropological study of the human skeletal remain was conducted.

The skeleton is presumed to be of a mature male.

The length-breadth index is [81.97], brachycranial. The zygomatic facial breadth is 141mm, the middle facial breadth is 105mm, the facial height is 115mm, the upper facial height is 68mm, the facial indices are (81.56) (K), (109.52) (V), the upper facial indices are 48.23 (K), 64.76 (V). This skeleton has a low and wide face.

The subtrochanteric portion of the femur is platymeric.

Artificial tooth extraction and aural exostoses are not found.

西潤野 2 号墳出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田光子
宮内庁正倉院事務所 成瀬正和

はじめに

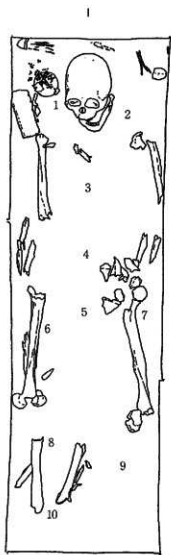
西潤野 2 号墳出土の赤色顔料については、宇土市教育委員会の御厚意により調査時に観察と試料採取を行った。石棺の蓋石内面と棺身内面及びその合わせ目が赤色に塗られていた。棺内床面は敷かれた礫が全体にやや赤かった。これらの赤色は肉眼で見える限りベンガラによるものと判断された。棺内の人骨はほぼ原位置を保っていると思われるが、頭骨の正面に朱と思われる赤色顔料が付着していた。以上の赤色顔料の種類と使われ方を知るために以下の要領で試料採取、調整、顕微鏡観察とX線分析を行い若干の考察を試みた。第17表に試料の一覧と分析結果、それに基づいて推定される赤色顔料の種類を示した。

試料

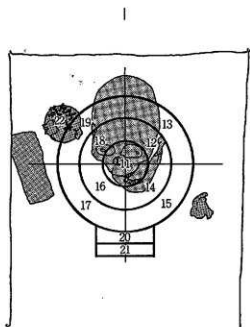
試料の採取位置を第37、38図に示す。採取は頭骨と鏡、玉が出土位置にある時(第37図)とそれらの取り上げ後(第38図)に2度に分けて行った。他に石棺の蓋石、側石、小口石から赤色部分をステンレス製のカッターで削り取った。(50mm以下)。また、頭骨の眼窩内に残っていた赤色顔料の小塊(10mm以下)も採取した。

No1~22は礫と土砂で各々30g~50g程度である。赤色の付着状態、赤色顔料の有無、種類等について細かく観察し、試料調整を行った。ベンガラと思われる赤色顔料は礫に垂れたり、溜まった様な状態で付着している。特にNo1~4、11~22の礫には赤色顔料が厚く残っており、土砂に混じって赤色顔料の小塊も認められる。また、これらのうちNo1、2、11~22は明らかに2種の赤色顔料が並存していることが肉眼でも観察された。ベンガラと思われる赤色顔料は礫に直接付着しており、朱と思われる赤色顔料がその上についていることがわかるもの(No4、19~22)もある。No4と19は2種の赤色顔料をはっきり分離することができた。これらについてはX線分析には主として赤色の濃い部分を一定量採り研和して試料とした。検鏡用には、赤色顔料部分の他に肉眼では赤色顔料を認められない部分、及び全体を混ぜたものから抽出した部分についてもプレパラートを作成した。

No23~26については混入土砂をできるだけ除去した後、赤色部分から針先に付く程度の量を採取しプレパラートを作成し、残りを研和してX線分析の試料とした。



第37図 試料の採取位置



第38図 遺物取り上げ後の試料採取位置

顕微鏡観察

実体顕微鏡、光学顕微鏡により反射光で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。墳墓出土の赤色顔料はベンガラ(酸化第二鉄)と朱(硫化水銀)であるが、両者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。検鏡結果は第17表に示した通りである。No5～10、23～25にはベンガラ粒子だけを見出した。それ以外には朱とベンガラの両粒子を認めた。No3、4は肉眼観察では朱が認められなかったが検鏡により朱を確認した。また、赤色顔料部分及び試料全体を混ぜたものから抽出したプレパラートを検鏡して2種の赤色顔料の相対量(ベンガラに対する朱)を大まかに観察した結果を備考欄に示した。

蛍光 X 線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として行った。理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球;クロム対陰極、印加電圧;40kV、印加電流;20mA、分光結晶;フッ化リチウム、検出器;シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2 θ);10~65°、フルスケール;2000cpsの条件で行い、照射面積はチタンのマスクを用い一定にした。結果は第17表に示した通りであるが、鉄及び水銀の有無のみを表中に記した。赤色顔料の主成分元素としてはNo1~4、11~13、14b~19、19b~22、26に鉄と水銀が、その他は鉄のみが検出された。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として混入の土砂部分に由来するものと考えられるので省略した。但し、検鏡によりベンガラが認められていない14b、19b、26で検出された鉄は朱と土砂のどちらに由来するか不明である。

X 線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として行った。理学電機(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球;クロム対陰極、フィルター;バナジウム、印加電圧;25kV、印加電流;10mA、検出器;シンチレーション計数管、発散および受光側スリット;0.34°、照射野制限マスク(通路幅);4mm、ゴニオメーター走査範囲(2 θ);30~70°フルスケール;800cpsの条件で行った。結果は第17表に示した通りである。辰砂(Cinnabar 赤色硫化水銀)、赤鉄鉱(Hematite 酸化第二鉄)の有無のみについて記した。赤色顔料の主成分鉱物としてはNo14b、19b、26以外の全てに赤鉄鉱を、No1~3、11、12、14b、16~19、19b、22、26に辰砂を同定した。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として混入土砂由来のものなので省略した。

ま と め

棺内面に塗布された赤色顔料はベンガラである。床面は第37図1、2～4まではベンガラと朱が検出され朱の量は1、2→3→4と減少する。5～10はベンガラのみである。第38図は朱の拡散状況を見るために行った採取位置図である*。頭骨を取り上げた後のものであり、直接には本来の姿を反映しているとは言えないが、朱が11、16、18を中心として周辺に拡散していることが推定される。頭部で見られる朱の拡散状況と、3、4の位置では朱が肉眼では認められなかったことから、朱は被葬者の頭胸部に散布されたのではなく、頭部正面(額、眉間を中心として)に施されていたものと考えられる。床面から検出されたベンガラは礫に直接残っているものが多くその残り具合から見て床面全体に塗布あるいは散布されていたものと思われる。また、朱とベンガラが混在している試料(14、19)でもその両者をはっきりと分離できることは、以上の状況を裏付けるものと思われる。

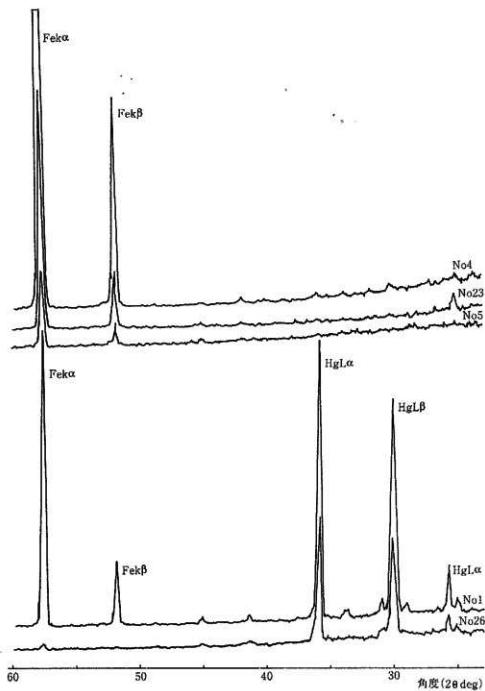
西潤野2号墳では石棺内面をベンガラで塗彩、床面全体にもベンガラを塗布・散布し、遺骸の頭部には朱を施して埋葬したと考えられる。朱が「いつ、どこで」施されたか、今の所は想像の域を出ない。今までの少なからぬ分析例からみて、弥生時代から古墳時代の墳墓ではその当初より、基本的に「遺骸には朱、埋葬施設にはベンガラ」と使い分けられているが、赤色顔料として朱のみが検出される場合と、ベンガラと朱の両者がある場合がある。古墳では時代が下るに連れ後者のタイプが多くなるように見受けられる。しかし、実際には床面検出のベンガラが、遺骸に散布されたものなのか、遺骸を置く前にすでに床面に塗布・散布されていたのか、埋葬施設の形態や埋蔵状況に左右されるものでもあり具体的に確かめられた例は多くない。本例は床面検出の赤色顔料、特に朱とベンガラの時間的關係について考える好資料である。

* 同時に拡散による朱の粒度分布の変化を調査する目的もあったのだが、今回は試料調整、実験が不充分なので改めて検討する機会を持ちたい。

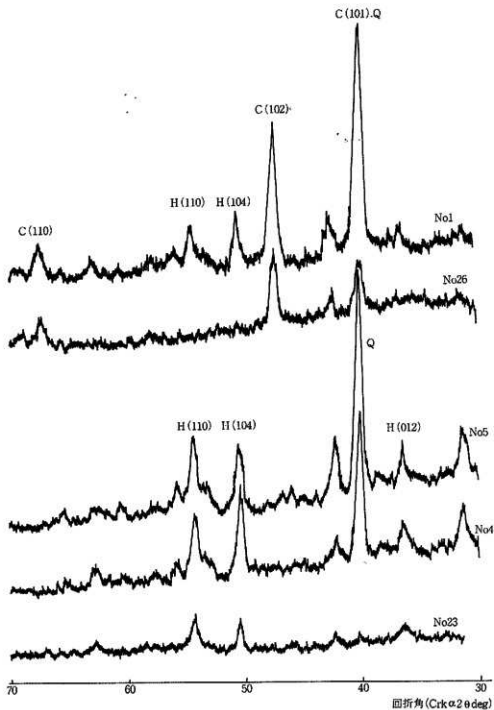
第17表 赤色顔料の分析結果及び推定される赤色顔料の種類

試料 No	試料の採取位置		蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察		赤色顔料の種類	備考	
			鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂	ベンガラ	朱			
1	第37図	1	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱		
2	第37図	2	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱		
3	第37図	3	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱	朱は少	
4	第37図	4	+	+	+	-	+	+	ベンガラ、朱	朱は微	
5	第37図	5	+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
6	第37図	6	+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
7	第37図	7	+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
8	第37図	8	+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
9	第37図	9	+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
10	第37図	10	+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
11	第38図	11	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱	朱は多	
12	第38図	12	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱	朱は少	
13	第38図	13	+	+	+	-	+	+	ベンガラ、朱	朱は微	
14	a	第38図	14	+	-	+	-	+	-	ベンガラ	
	b	第38図	14	+	+	-	+	-	+	朱	
15	第38図	15	+	+	+	-	+	+	ベンガラ、朱	朱は微	
16	第38図	16	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱	朱は多	
17	第38図	17	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱	朱は少	
18	第38図	18	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱		
19	第38図	19	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱	朱は少	
19	a	第38図	19	+	-	+	-	+	-	ベンガラ	
	b	第38図	19	+	+	-	+	-	+	朱	
20	第38図	20	+	+	+	-	+	+	ベンガラ、朱	朱は微	
21	第38図	21	+	+	+	-	+	+	ベンガラ、朱	朱は微	
22	第38図	22	+	+	+	+	+	+	ベンガラ、朱		
23	石棺石蓋内面		+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
24	石棺側石内面		+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
25	石棺小口石内面(脚部側)		+	-	+	-	+	-	ベンガラ		
26	頭蓋眼窩内(眉間か)		+	+	-	+	-	+	朱		

+は検出、-は未検出

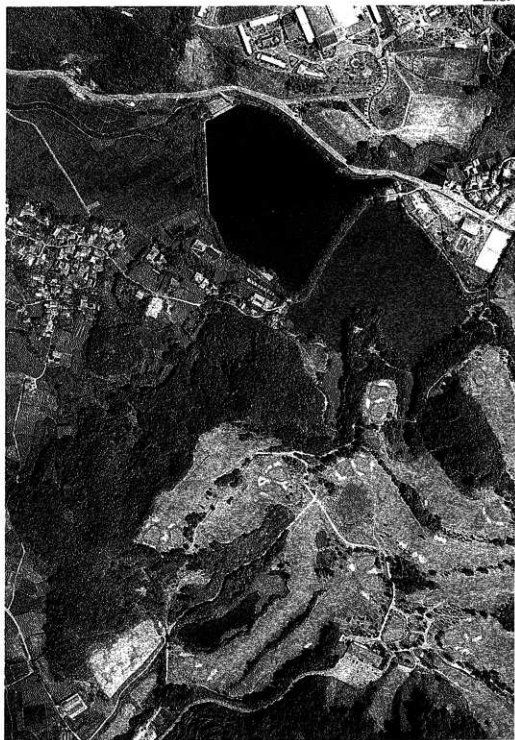


第39図 蛍光X線スペクトル図

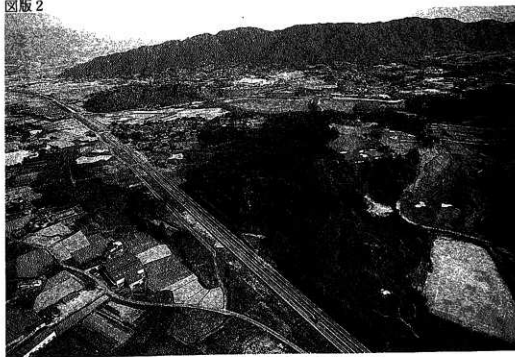


第40图 X線回折図

圖 版



立岡古墳群空中写真



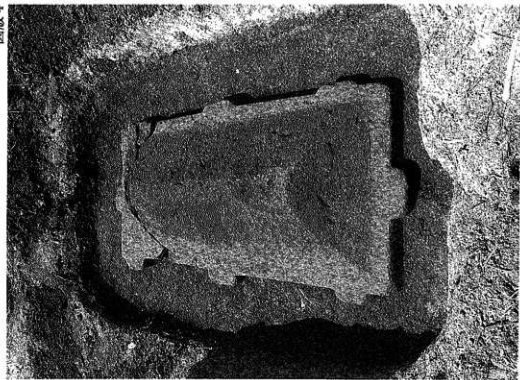
立岡古墳群空中写真（南西側より）



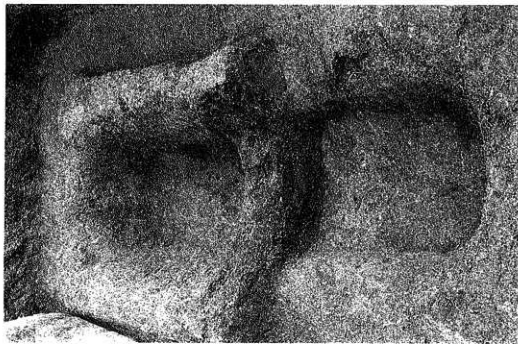
西潤野古墳近景（南側より）



西潤野古墳遺構配置状況



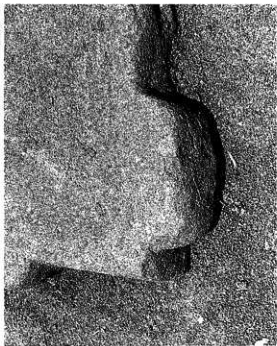
西潤野古墳 1 号棺 (東側より)



西潤野古墳 1 号棺土塚 (西側より)



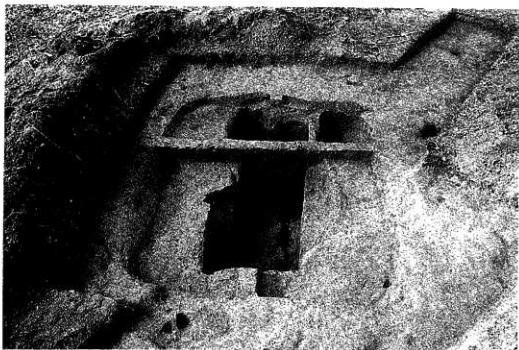
西洞野古墳 2号棺



西洞野古墳 1号棺繩掛突起



西潤野古墳 2号棺



西潤野古墳 3号棺

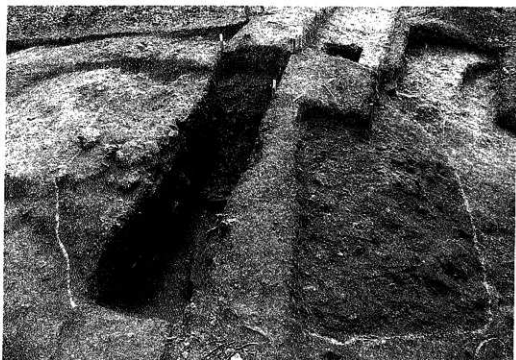


西潤野2号墳墳丘（北側より）

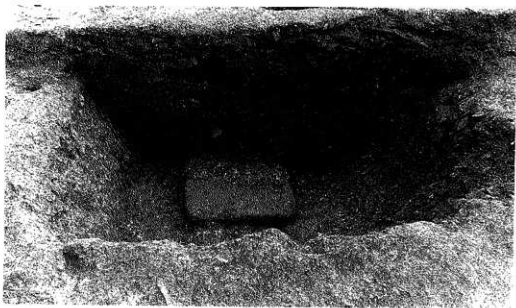


西潤野2号墳墳丘（南側より）

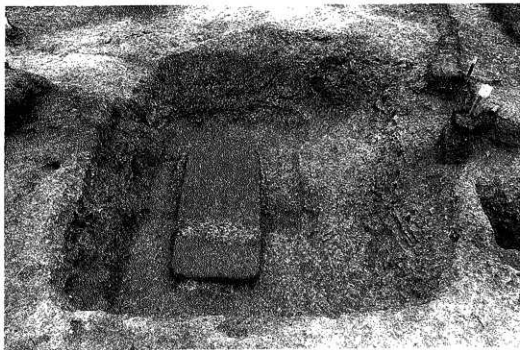
図版 8



西潤野 2 号墳墓検出状況



西潤野 2 号墳墓断面



西潤野 2 号墳主体部（開棺前）



西潤野 2 号墳主体部（開棺後）



西潤野2号墳棺内状況



西洞野 2 号墳棺内遺物出土状態



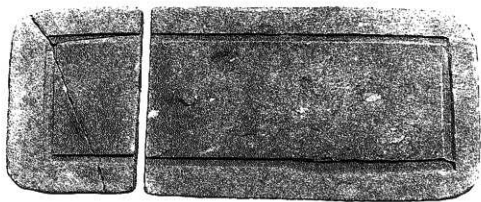
西潤野 2 号墳棺内遺物出土状態



西潤野 2 号墳棺内遺物出土状態

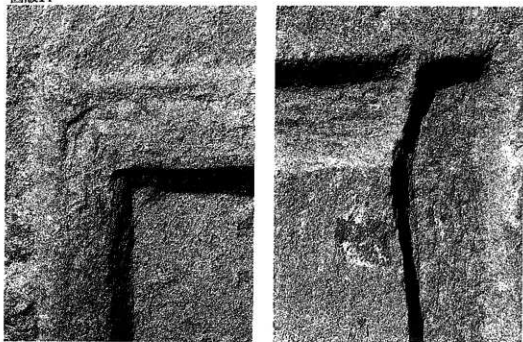


西潤野 2 号墳箱形石棺蓋石



西潤野 2 号墳箱形石棺蓋石下面

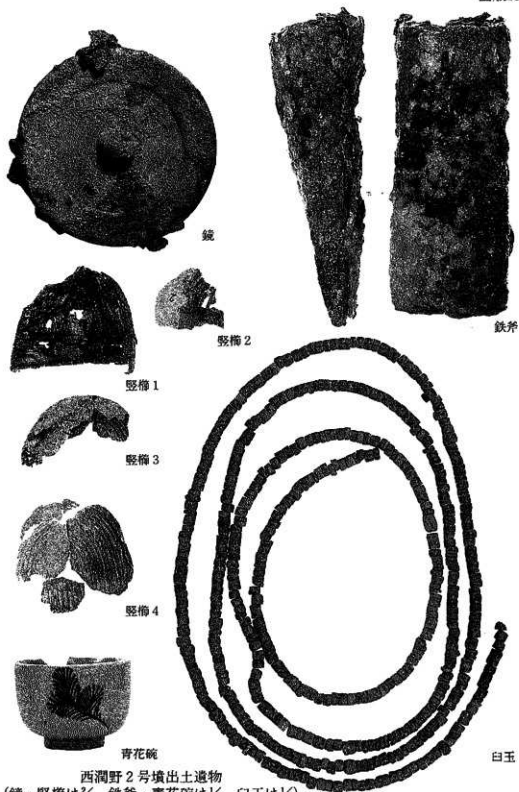
図版14



西潤野2号墳箱形石棺蓋石下面



西潤野2号墳主体部と近世墓



西潤野2号墳出土遺物
(鏡・豎櫛は $\frac{3}{4}$ 、鉄斧・青花碗は $\frac{1}{2}$ 、白玉は $\frac{1}{4}$)

図版16



潤野2号墳墳丘（北西側より）



潤野2号墳墳丘（南東側より）



潤野3号墳墳丘（東側より）



潤野3号墳前方部（後円部より望む）



潤野3号墳鞍部



潤野3号墳後円部墳頂



酒野3号墳T-2（前方部より後円部を望む）



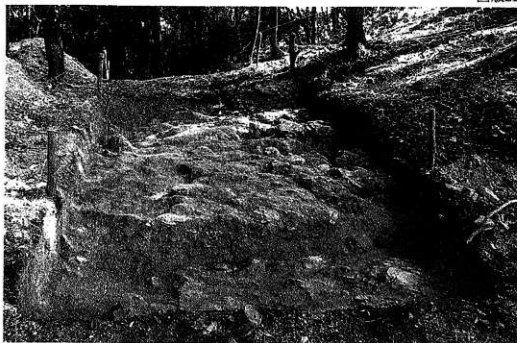
酒野3号墳後円部墳頂土器出土状況



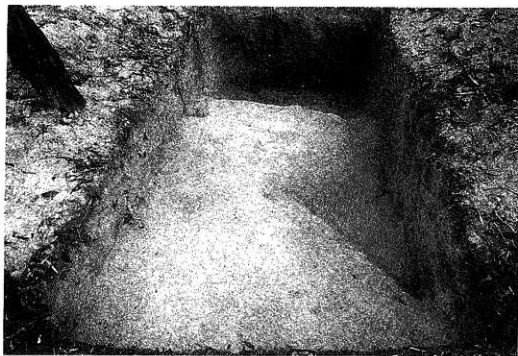
潤野3号墳T-3 (南側より)



潤野3号墳T-5 (北側より)



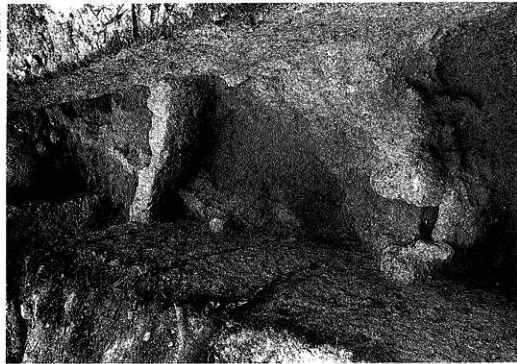
潤野3号墳T-4（北側より）



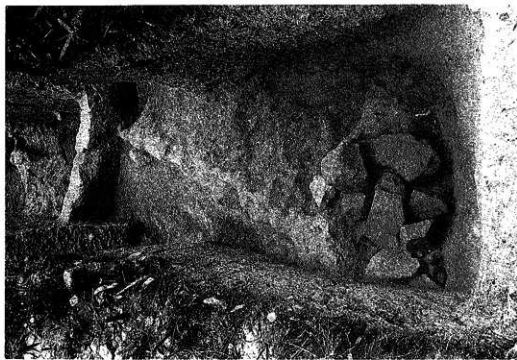
潤野3号墳T-6（北側より）



洞野3号墳主体部



酒野3号墳主体部（東側より）



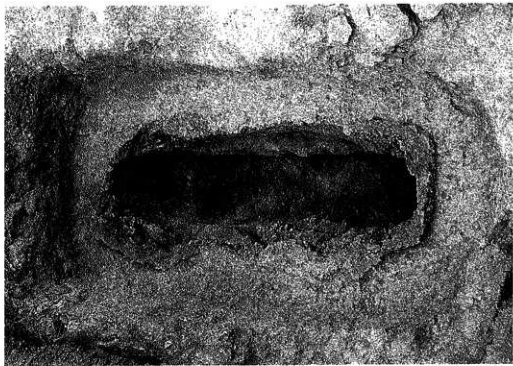
酒野3号墳主体部（西側より）



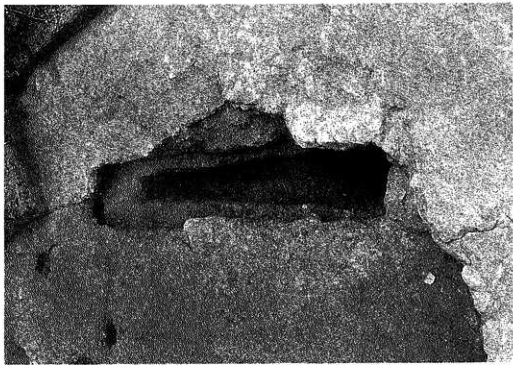
潤野3号墳2号土壙墓（粘土被覆状況・東側より）



潤野3号墳2号土壙墓（粘土被覆除去後・東側より）



澗野3号墳2号土坑墓(南側より)



澗野3号墳1号土坑墓(北側より)



1



2



3



5



4



6



7



8



9



10



11



12



13



14



16



15



玉1



玉2



17



18



19

潤野3号出土遺物
(Noは遺物Noに一致、土器は約1/2、玉は1/2)

立 岡 古 墳 群

宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集

平成4年3月31日

発 行 宇土市教育委員会

熊本県宇土市浦田町51番地

印 刷 (株)城野印刷所

